

結婚の意義

「同性婚」「夫婦別姓」「婚活」「生涯未婚」など、現代日本社会は「結婚」に関するキーワードであふれています。しかし一方で、「そもそも結婚って何?」という根本のところが、実は置き去りにされがちではないでしょうか。

法制度・文化・習俗など、「結婚」には多様な側面があります。友人や恋人やきょうだいや、他のさまざまな関係と区別する、ズバリな「結婚の定義」はあるのか?それともそんなものはないのか?すべての人が無関係ではいられない「結婚」の定義について、いろいろな人たちとさまざまなかたちで語り合い、多面的な視点から考察していきたい。そんな思いから始まったプロジェクトが、メディアスタディーズ「結婚の定義」です。

本冊子は、2022年度から2025年度にかけて実施された「結婚の定義」プロジェクトのさまざまなりくみについてまとめたものです。

「結婚とは何か」、この正解のないテーマについて、本冊子をご覧になった皆様にもぜひ、自分なりに考えてみていただけたら嬉しいです。

♀ × ♀ お茶っこ飲み会・仙台

卷頭インタビュー	「よくできた境目」としての結婚／ロバート キャンベル	4
----------	----------------------------	---

結婚とはなにか	第1章 報告	「結婚の定義」ミニ展示を実施しました	10	
	インタビュー	40代独身、農家の長男／キャシー	12	
		関係が壊れたときのためにこそ、制度としての結婚が必要だと思います／non	16	
		結婚は「当たり前」じゃないから／小野寺真	20	
結婚指輪	報告	てつがくカフェ「結婚の定義」全5回を振りかえって／てつがくカフェ@せんだい	25	
		コラム	永続的な精神的及び肉体的結合を目的として 真摯な意思をもって共同生活を営むことについて／MEME	28
			結婚ではないなにか／MEME	29

第2章	エッセイ	結婚指輪の魔法／キャシー	32
		左手薬指を取り戻す日／MEME	34

結婚指輪		結婚指輪を外してみたら／創	35
	報告	〈ミニ展示〉あなたの「結婚指輪エピソード」教えてください!	38

エッセイ・番外編	祝祭と日常を繋ぐ輪／MEME	43
----------	----------------	----

第3章	エッセイ	結婚式の定義／創	46
-----	------	----------	----

報告	〈ミニ展示〉「結婚式」に思うこと教えてください!	52
----	--------------------------	----

結婚式		〈トークイベント〉キャラ婚した人と考える「結婚式とは?」	58
-----	--	------------------------------	----

コラム	LGBTの私がフィクトセクシュアルに注目する4つの理由／MEME	82
-----	----------------------------------	----

	「ムカサリ絵馬」と「結婚」／鳥居建己	84
--	--------------------	----

用語解説・メディア掲載情報	88
---------------	----

「よくできた境目」としての結婚

ロバート キャンベル / Robert Campbell

せんだいメディアテーク館長

インタビュー実施日 2025年10月15日

聞き手 MEME（めめ）



写真提供：ロバート キャンベル

そもそも私にとっての結婚は、非常に実利的、現実的なものです。私は2017年にアメリカで日本人男性のパートナーと同性婚していますが、ふたりの関係を世間に認めてもらいたいといった気持ちはほとんど起きず、華やかな結婚式にも全く興味がありませんでした。でも、結局は結婚して挙式もしたのですけれど。ニューヨーク州の田舎町に暮らす実父が、地域を巻き込んでお膳立てして、外堀を埋めていったのです。

実父は私が幼い頃に母と離婚して、ずっと離れて暮らしていたのですが、私のパートナーのことをとても気に入ってくれて。私たちふたりを結婚させることが父親である自分の務めと感じたようです。父の地元にはパートナーを連れてたびたび遊びに行っていたのですが、同性婚している人が多い地域だったこともあり、父は近所の人たちに「長く付き合って支え合っているのに、なんであのふたりは結婚しないんだ」「なんであのふたりを結婚させないんだ」なんて言われたりもしていたみたいですね。日本で暮らしている分には同性婚してもメリットがありませんし、私たちとしては結婚する気はなかったのですが、父は「俺は結婚ダメだったけど君たちならうまくやれるよ!」「結婚するといろいろお得だよ!」と盛んにアピールを繰り返していました。そしてさらに、「近所のベーカリーの人がすごくおいしいケーキを作ってくれるってよ!」とか、「近所のヴァイオリニストが生演奏てくれるってよ!」とか、結婚式を手伝ってくれるという地域の人たちもどんどん集まり、「身一つで来ればいいから!あとはこっちで全部やるから!」と説得されて、どんどん断れない雰囲気になっていったんです。

どうかな、と思いましたが、父の気持ちも分かりました。父と私はずっと複雑な関係でしたが、おたがい年齢を重ね、それを乗り越えてきた経緯があったんです。自分が生きているうちに、父親らしいことがしたかったんでしょうね。それに日本でも、まだ同性婚はできないけれど、社会は徐々に変わってきました。そんな流れの中で、パートナーとふたりでいろいろ考え方話し合い、結婚することに決めたんです。

夏休みにアメリカに行って結婚手続きを済ませ、結婚式も挙げました。父の家の裏の広い芝生に白い大きなテントを張って、ケーキや持ち寄った料理を並べて、音楽の演奏もあって、素敵な結婚式でした。私もパートナーも、結果的にはやって良かったと思っています。すでに他界していた母や継父の出席が叶わなかったのは残念でしたけれど。

ちなみに、日本に戻ってから東京のホテルで友人やお世話になっている人たちを50人くらい招いて、ちょっとした結婚お披露目パーティも開催しました。誕生日パーティだって言って集まってもらって、サプライズでやったんです。友人たちも盛り上がりってくれて、とても楽しかったのですが、アメリカと違って結婚といっても法律的な意味はないんだなとも思いましたね。

結婚して実感したのは、夫とユニットで扱われるようになったということです。結婚というのはそういう記号になっているんですね。人間関係のひとつの入口、基本形といいますか。

先日、結婚式に出席してくれたアメリカの友人が夫婦で日本に遊びに来てくれて、3人で食事に行ったのですが、私の夫の話をすごくしてくるんです。向こうも夫婦で来ているので、ユニットとユニット、家族と家族というアプローチで会話をしているわけですね。それが良いとか悪いとかいうことではなく、やめてほしいと拒むつもりもありません。ただ、そういう家族同士の付き合いでおたがいを確かめ合っていくというのは、面白いことではあると思います。

ちなみに私の場合、結婚相手の話になったとき、パートナーという言葉を使うこともありますけれど、日本語では自然に夫と呼ぶことが多いです。特に意識してそう言っているわけではないのですが、そうすることで、関係性を可視化できますし、自分がどういう形で生きているか共有することができます。これは嬉しいことだと思います。聞き手の側がどのように思っているかは分かりませんけれど。

ひとりで生きていくのが難しい社会で、結婚はいわば生命維持装置のひとつだといえます。日本の場合、一般論ですが性別による分業が根強くあって、男性は女性のケア労働を頼りに生きていく。女性は男性の経済力を頼りに生きていく。「嫁」という言葉に象徴されるように、家族の中で職位のようにひとりひとり役割があって、その役割分担が性によってきっちり決められている。もちろん日本に限った話ではありませんが、私が生まれ育ったアメリカと比べて、日本はそれがより強固だと思います。最近では独身を通す人も増えていますが、やはりそういった、明治時代からの家父長制の名残が、この社会の基礎になっている。結婚というものが湯水のように日本の社会空間に溢れている。

結婚しているか否かで、さまざまな社会資本に対するアクセスのしやすさが大きく異なる状況があります。医療のことだったり財産のことだったり子育てのことだったり、結婚していないと不利になる。今、同性婚や選択的夫婦別姓が日本の司法の場で争われているのにはそういった背景があります。結婚はすべての人にフィットするものではないけれど、選択はできるようになってほしいですね。もちろん、結婚を選ばない人もいて当たり前ですが、選びたい人には選べるようにしてほしい。

たとえばフランスのPACSのような、結婚とは異なる新たな制度をつくるというのも決して悪いことではないと思いますが、ただ、結婚もPACSも選べる人がいる一方で、PACSしか選べない人もいるということなのであれば、それはやはり不公平だと思います。特に、結婚の方が価値が高いものとして扱われている現状においてはなおさらですね。

ひとりひとりが自分の潜在的な能力をフルに発揮できるように、この社会の制度設計をどういうふうにしていくか。私自身はやはりそういった実利的な視点から結婚について考えたいと思います。机上の空論ではなく、あくまで実際に生きている人たちの人生の話として。その具体的なあり方については、多くの人たちが話し合って合意形成できるものということになるでしょう。

結婚という制度そのものが差別的だから全廃すべき、という意見もありますが、国境というものがなくなるないように、結婚というものもなくならないと思います。

たとえば、自分の土地と隣の土地の境目を決めるために、測量して石を埋めて、そこに垣根や壁をつくる。そういう境目をつくるということは、私たちひとりひとりの権利であるとか、養分であるとか、文化的なアイデンティティを守るために、人間社会で平和に、公平に生きるために、大切なものです。

今を生きる私たちに突きつけられている現実、ナメクジに塩をかけるみたいに、あらゆる境目を溶かしてなくしてしまおう、グローバル社会をつくろう、なんて言ってみても、結局境

目がなくなることはないのなら、むしろ境目を逆手に取っていくことが必要なのではないでしょうか。

ある特定の人と結婚することは、ある意味、境目を定めるということです。いろいろなことがある中でおたがい支え合うということを同意する。さまざまな社会資本を使ったり、地域の人たちと共に助けて支え合ったりもするわけですが、たとえば生きるか死ぬかという大切な判断であるとか、どういうふうに自分たちの未来を切り開いていくのかとか、そういったことについての最小単位として、結婚はやはり重要なものです。

あとはやはり、生殖に関わることが大きいですね。子どもが生まれて育つということがあって、その内と外、当事者とそうでないものの境目を定めるということ。

私自身も母子家庭で思春期まで育てられましたし、親の婚姻の有無や家族構成によって子どもの人生に格差が生じるのはあってはならないことです。しかしやはり、子育てのための社会の基盤のひとつとして、結婚というものは重要ですし保つべきものだと思います。子どもに食物や医療、公教育などがきちんと行き渡るかどうかチェックする最小単位として、かなりよくできた仕組みであると思います。

ほとんどすべての社会において、形は変われど結婚というものがある。まず子どもが育つために限られた資源を分配する装置として、そしてその上で、ひとりひとりが尊厳を持って生き抜くために使われる仕組みでもあると思います。

もちろん、さまざまな生き方があるわけで、結婚しているかどうかに係なく誰もが公平に扱われるべきです。ただ、結婚というものはある意味、よくできた境目といえます。自在に自己責任によって決めるができるし、離婚して解消することもできる。可変性が制度の中に組み込まれている。これはやはり人間のひとつの英知、知恵として定まっているものだと思います。

時代によって、結婚の定義を考え直したり、境目の線を引き直したりすることはあるでしょうが、なくなることはないものだと思います。

ロバート・キャンベル／Robert Campbell（せんだいメディアテーク館長）

近世・近代文学を専門とする日本文学研究者。文学博士。早稲田大学特命教授、早稲田大学国際文学館（村上春樹ライブラリー）顧問、国文学研究資料館前館長、東京大学名誉教授。

第1章 「結婚とは何か」

「結婚の定義」ミニ展示を実施しました

期間：2023年2月1日(水)～2月28日(火)9:00～22:00 ※2月24日(金)は休館日

場所：せんだいメディアテーク 1階エレベーター横

「結婚の定義」第1弾企画として、「結婚」にまつわるキーワードについてのシールアンケートや、「結婚の定義」に関するメッセージ募集、キーワード解説パネルの設置などを実施しました。期間中、日々増えていくシールの数は想像以上で、慌てて台紙を追加したほど。年齢も性別も性のあり方も既婚未婚もさまざまな方々から、手書きの真摯なメッセージもたくさんいただきました。

あらためて、このテーマがすべての人にとって無関係ではいられない重要なものであること、簡単にひとくくりにはできない多様性があることを強く感じる結果となりました。

シールアンケート

結婚に関するキーワード12項目、現行法令上要求されている「セックス」「貞操義務」「扶養義務」「同居義務」、何かと結婚と結びつけられがちな「愛情」「恋愛感情」、世間で“結婚する理由”としてよく挙げられている「親のため」「世間体のため」「子供を持つため」「老後のため」「金のため」「家事をしてもらうため」についてシールアンケートを実施。それぞれ300件以上の回答をいただきました。結果は表のとおりです。

目を引いたのは、どの項目でも台紙の「真ん中の線」にシールを貼った人が一定数いたこと(表では「どちらでもない」として集計)。「シールを貼らない」という選択肢もある中で、あえて「わからない」気持ちを「真ん中の線」に託した思い、大切にしたいと感じました。

メッセージ募集

「『結婚の定義』私はこう考える」「結婚について思うこと」「結婚にまつわるエピソード」などについてメッセージを募集。48件の真摯なメッセージをいただきました。

キーワード解説

キーワード解説パネルを設置し、「結婚」の多様な方について紹介しました。

シールアンケート結果

	必要	不要	どちらでもない	合計
愛情	355	11	4	370
恋愛感情	236	89	27	352
セックス	200	95	47	342
貞操義務	239	72	14	325
扶養義務	131	160	37	328
同居義務	68	264	22	354

	YES	NO	どちらでもない	合計
親のため	37	289	6	332
世間体のため	41	284	9	334
子供を持つため	135	184	24	343
老後のため	139	180	15	334
金のため	94	239	18	351
家事をしてもらうため	43	286	4	333



40代独身、農家の長男

キャシー 1977年生まれ 宮城県出身・在住

インタビュー実施日 2023年3月13日 聞き手 MEME

宮城県北で代々続く農家の長男です。といっても、跡取りの父は母と結婚してから実家を離れて暮らしていたので、田畠のある家で生まれ育ったわけではありません。父と母と自分と弟の4人家族でした。

父はサラリーマンをしながら、週末のたびに実家に通って農作業をする生活を続けていました。平日は夜遅くまで仕事して、土日は朝早くから農作業。それをこなしていた父は本当にすごかったと思います。自分もけっこ手伝ってました。免許もないし農業機械は扱えなかつたので、手作業でできることですね。刈った稲を干したりとか。農作業があるので、家族旅行なんかしたことなかったです。ゴールデンウィークとか、田んぼは繁忙期ですし。

母も宮城県北の出身で、父とは仕事関係で知り合ったみたいです。結婚してからは内職やパートをしながら主婦業をこなしていました。

農家を継ぐことや、結婚して子供をつくることについて、父や母から何か言われた記憶はありません。でも祖父母からはずいぶん言われてました。父方母方両方から。

「大人になったら農業やれ、この家を継げ」っていうのは、小さい頃から刷り込まれてましたね。「絶対継がない」って、10代の頃から言っちゃってましたけど。「早く嫁をもらってひ孫の顔を見せろ」っていうのも、10代の頃からさんざん言われてました。

はじめはただ「うるさいな」というかんじだったのですが、時が経つにつれ「申し訳ない」という気持ちが強くなってきて……背景には、男性に惹かれる自分の性質がありました。

男の子が好きだという気持ちは、今思えば小学校低学年頃からあったのかな。同級生にすごく綺麗な男の子がいて、気になってずっと目で追ってました。小学校高学年くらいから、そういう気持ちがはっきりしてきたのですが、ゲイとか同性愛とか、そういう知識は全然なくて。こんな人間は世界に自分だけだと思っていました。だから誰にも言えなくて。一生隠していくんだろうなって。

田舎が嫌で、大学は東京に行かせてもらいました。とはいえる入学してみたら、自分の代からキャンパスが神奈川の山の中に移ってしまったんですが(笑)でも、まっさらな場所で、1年生だけで1からつくりあげていくのは楽しかったですね。

大学生ともなると、周りにカップルも多くなってきて。それで、自分も周りと同じように誰かと付き合った方が良いのかなと思うようになって、同級生の女の子に告白しまくっていました。当時、気になる人が男女合わせて常時10人くらいいたんですよね。今思うと、それが本気の恋心だったのかどうかよく分かりませんけど。でも男の子には告白なんてできなくて、女の子だけに告白していました。だけど全員に断られて。本気じゃないのが見抜かれていたのかもしれません。

これまでの人生で、女の子に告白されて付き合ったことは、何回かあるんです。といつても深い関係になるわけでもなく、なんとななくうまくいかなくなっていて、自分からお別れしてしまったり。告白された時点でなんだか怖くなってしまって断ってしまったこともあります。自分の方でも、素敵なお子だなと思っていたんですけどね。

大学生の時、ビデオショップでゲイビデオを見つけて衝撃を受けたんです。高かったけど何本も買って観まくりました。でもやっぱり、ビデオの中の光景が現実にリンクするものとは思えなくて。相変わらず、現実には自分みたいな人間は他にはいないと思っていました。

学校を卒業してから実家に戻って、公務員を目指して勉強していたのですが、結局受からなくて。心身共にいろいろしんどい時期でした。

「家の光」っていう農家向けの雑誌があるんですけど、美輪明宏さんの人生相談コーナーがあって。そこにセクシュアリティの悩みを投稿したりしていました。母にもとうとう打ち明けて。母は受け入れてくれたけど、「お父さんには言わないでね」って言われました。自分としても、父には言うつもりはありませんでした。弟には母から伝わったみたいです。

そんな中、ネットが使えるようになっていたので、検索して仙台にゲイショップがあることを知り、アルバイトさせてもらったんです。はじめなくて結局数日で辞めてしまったのですが、当時の店長さんにとても良くしていただけて。仙台のゲイコミュニティの人を紹介してもらって、ゲイベンツにスタッフとして関わったり、HIV関係のボランティア活動に参加したりするようになりました。

公務員試験はダメだったので、地元の会社に就職して、サラリーマンのかたわらゲイコミュ

ニティの活動に関わっていくことになったのですが、その会社というのが「何かというと社員全員で風俗に行く」ようなところで。先輩に半ば無理矢理連れて行かれて断ることもできず、団らざも女性と接する経験を持つことになりました。一方で、ゲイコミュニティに関わって友人知人は増えたけれど、恋愛や付き合いをまだ怖がってしまう自分がいて。ボランティア活動には参加できても、ゲイバーや夜のイベントにはなかなか行けなかったり、ゲイの友人に告白されたのに断ってしまって気まずくなったり、そんな調子でした。

その会社は数年で辞めて、何年か県外で働いてまた宮城に戻り、医療系の資格を取得して転職、現在に至っています。

数年前に父が事故で突然亡くなったんです。祖父母が他界して空き家になっていた実家の家屋敷や、持ち山や田畠の管理、全部父がやっていたので、途方に暮れてしまいました。

家屋敷だけは母が定期的に風を通しに行ってますが、田畠は今はもう、荒れるに任せています。母とは、自分たちが元気うちに始末をつけようねと話しています。そうしないと将来、県外に居を構えた第一に負担がかかってしまうことになりますから。

とはい、父方の親戚たちがうるさいので、かれらが元気なうちは処分はできないけどね。「本家がなくなるのは嫌だ」って言われて。母は嫁なので、やっぱり強くは言えないみたいです。

うちだけじゃなく、実家のあたりはもう、荒れ果てた田んぼだらけです。どこの家も繼ぐ人がいなくて。作れば作るほど赤字になるような状況じゃ、誰も継ぎたがらないですよね。農“家”といいますが、家族経営はもう限界だと思います。企業化・組織化するとか、もっとすすめていかないと。

父は自分に、これをしろとかあればやるなとか、一切言わない人でした。田んぼを継げとも、嫁をもらって子供をつくれとも、父からは全く言われたことがありません。田んぼを継ぐ気がないことは、かなり早い段階から伝えていましたが、それで怒られることもありませんでした。まあ、それに関しては父も、今の時代に田んぼはもう無理だと感じていたんだとは思います。でも、本当は継いで欲しいと思っていたんじゃないかなという気もします。

父は自分のこと、どう思っていたんでしょうね。自分が男性に惹かれる性質だということ、父に伝えることはありませんでしたが、気づいていたのか、どうか。聞いてみたいことがたく



写真提供:キャシー

さんありますが、今となっては叶わない話です。

子供の頃は、「女性と結婚して子供をつくる」という“当たり前”的のレールに、自分も大人になつたら自然に乗っかっていくんだろうな、と、なんとなく思っていたのですが、男の子に惹かれるようになって、そうじゃないんだなって。孫の顔が見せられなくて申し訳ないって、ずっと思っていました。そんな“当たり前”的のレールに乗らなくてもいい、と心から思えるようになったのは、父が他界してからのような気がします。父は抑圧的な人ではありませんでしたが、それでもやっぱり、何か解放されたようなかんじがあって。

ゲイコミュニティに関わるようになり、多様な性のあり方やライフスタイルがあることを知りましたが、それでもまだ、“当たり前”に縛られているところがあったんだと思います。子供連れの夫婦なんか見ると、「うらやましい」って思っちゃってたんですよ。“当たり前”的のレールに自ら喜んで乗っかって、幸せを感じているように見える人たちが妬ましいというか。でも最近では、そんなこともなくなりました。人それぞれ良いじゃない?みたいに思えるようになったんですよね。あとは、弟が結婚して、子供もできたので、それでだいぶ気が楽になった面もあると思います。

女性を嫌悪しているわけではないので、いわゆる“友情結婚”はやろうと思えばできなくはないと思いますが、自分のエゴで不幸な人を増やすようなことはしたくないなと思います。そもそも、誰かと一緒に暮らしたい、という気持ちがもともと薄いんですね。正直なところ、子供が欲しいとも思わないです。自分にちゃんと育てられるとも思えないし。子育てには関わらないけど精子提供で自分の遺伝子だけは残したい、という願望もないですね。

最近話題の同性婚も正直ピンとこないです。世間一般がこれだけ結婚離れして、価値観も多様化しているのに、もともと多様であったはずの性的マイノリティが保守的な結婚の枠組みに自らを押し込めようとしているのが釈然としないというか。

自分の老後ですか?医療系の資格も取りましたし、働けるうちはずっと働いて、独り暮らしどけるうちは独り暮らしして生活したいですね。ゲイだけの老人ホームなんて夢物語もよく語られます、絶対ケンカになりそう(笑)無理に一緒に暮らさなくても、コミュニティスペースみたいな場を時々設けていろんな人と交流したりできたら良いですね。あと、やっぱり老後に田舎は大変です。病院かかるのも一苦労だし。老後は仙台の都心部あたりに住めたらと思っています。

関係が壊れたときのためにこそ、制度としての結婚が必要だと思います

nono（のん） 1982年生まれ 大阪府出身・宮城県在住

インタビュー実施日 2023年7月18日 聞き手 MEME

彼女と出会ってからもう15年近くになります。私がやっていたブログを彼女が読んでくれてたんですよね。当時私は関西、彼女は宮城に住んでいて、最初はおたがい顔も知りませんでした。それぞれ別に恋人がいて、恋愛でいろいろ悩んでいた時期だったので、私の文章に感じるものがあったのかもしれません。結局ふたりとも当時の恋人とは別れて、電話で頻繁にやりとりしているうちに、好きになってきました。

彼女は子供の頃からずっと女性が恋愛対象の人でしたが、実は私、それまで好きになるのは男の人ばかりだったんです。「身体が女性、心が男性」の人とお付き合いしたことはあったのですが、身も心も女性の人とのお付き合いは初めてで。でも、彼女と出会って、自分にとって好きになるのに性別は関係ないんだなって。それで、宮城と関西を行き来して何度か会ったりしているうちに、私が彼女の地元の宮城に移住して、一緒に暮らそうという話になりました。女同士だから、法律上の結婚はできない。じゃあ今の自分たちにできることって何だろうって考えてみると、やっぱり一緒に暮らすことかなって。

東北とは縁もゆかりもない中で移住を決めたので、関西の友達にはずいぶん心配されました。でも私、子供の頃から周りに外国の人が多くて。将来は海外に住みたいな、なんて思ったりしてたので、それに比べたら同じ日本だし地続きだし、全然遠くない。無理だと思ったらいつでも帰れるし、なんてことないって思ってました。

そんなこんな、仲の良い友達には詳しい事情も話していたのですが、自分の両親には、同性愛なんて言っても理解してもらえないだろうということは分かっていて。だから両親には「仕事の都合で東北に行く」って説明しました。

彼女の方も、当時は自分が女性とお付き合いしていることについて「親きょうだいには一生隠し通す」って固く決意してたんですよね。だから「女友達と同居する」ということにして、近くに暮らす彼女の親族と会うときには、あくまで友達としてふるまっていました。

一緒に暮らし始めたばかりの頃は、本当にケンカばかりでしたね。好き同士とはいえ、赤の他人が生活を共にするわけですから、価値観のぶつかりあいです。女同士の私たちには、「夫はこうあるべき、妻はこうあるべき」みたいなマニュアルもなかったので、とにかく話し合ってふたりにとってのベストを考えていくということの繰り返しでした。でも、これって今思えば男女の夫婦にとっても大事なことですよね。マニュアル通りがなじまない人たちだからいるわけですから。

そんなふうに彼女と暮らし始めてしばらく経った頃、東日本大震災が発生したんです。そのときはたまたま彼女と一緒にいて。海の近くだったので、ふたりで乗っていた車で避難所に逃げました。でも、避難所に着いてみると、建物の中はすでに人でいっぱい入れなくて。ふたりでいることで怪しまれてしまうのは嫌だなという気持ちもあって、車の中で一晩過ごしました。

結果的に、私たちの自宅も彼女の実家も、大きな被害はなかったので、発災翌日には自宅に帰って、停電の中ふたりでスーパーに並んだりして物資確保に奔走したのですが、どこに行ってもやっぱり、人目が気になってしまって。こんな大変な状況の中で、なんでこの人は家族じゃなくて友達と一緒にいるの?って、彼女が変に思われるんじゃないかな。ふたりの関係がバレてしまうんじゃないかな、って。だからできるだけ、彼女と一緒にいる自分の気配を消すように、存在感を出さないように努力しました。

私たちの自宅に彼女の親族が何日か避難してくることになったときも焦りましたね。寝室のダブルベッド見られたらどうしようとか。バレないようになんとかごまかして、事なきを得たのですが。

あのときの経験は大きかったです。彼女もやっぱりいろいろと、思うところがあったみたいでした。今回はたまたま一緒にいたから良かったけれど、もし離れ離れで被災していたら。自分たちの関係を秘密にしたままでは、おたがいを探すこともままならないんじゃないかなって。

そういうことをいろいろ考えていく中で、これからもふたりで暮らしていくんだったら、ふたりでお世話になっている人たちにきちんとごあいさつする機会が欲しいと思うようになりました。それで結婚式を挙げることに決めたんです。

当時はちょうど、ハリウッドスターの同性カップルが結婚式を挙げたりして話題になってい

た頃でした。日本の東北ではどうなんだろう?と思って、試しに宮城県内の結婚式場に「同性カップルでも結婚式挙げられますか」っていくつか問い合わせてみたら、ダメですっていうところ、1ヵ所もなかったんですよね。だったら結婚式挙げちゃおう!って。ふたりとも実は、結婚式とかウェディングドレスに憧れというのは全然なかったのですが、大切な人たちにふたりの関係をきちんと伝える良い機会になると思いました。それに、法律上同性婚ができる今の社会でも、女性ふたりで生涯を共にしようと真剣に考えている人たちもいるんだよって、世間に知ってもらいたい気持ちもあって。

挙式するって決めてから、彼女の親族やまわりの人たちに、徐々にふたりの関係を伝えっていました。最初は泣かれたりもしましたが、だんだんと家族として受け入れてもらえるようになって。そうやって1年かけて準備して、ついに迎えた結婚式当日は、式場に来てくれたたくさんの人たちに祝福してもらうことができて、本当にやって良かったと思っています。

とはいっても、世間の多くの夫婦がそうであるように、結婚式を挙げたからといって末永くずっと仲良し、というわけではなく、その後も大ゲンカして別れる寸前まで行ったこともあります。でもやっぱり、おたがいふたりで一緒にいたいって思って、踏みとどまつたんですね。いろいろなことを経験して、「ふたりでいる」ということに、腹がくくれていったかんじです。

私の両親はかなり保守的な人たちで、「お前のような未熟者はひとりで気ままに生きていても人間として成長できない。結婚して誰かと共に生きてこそ成長できるんだ。だから早くちゃんと結婚して自分中心ではない生き方をしなさい」って、ずっと言われて育ってきました。もちろん離婚なんてもってのほかです。だから私にとっての結婚のイメージって、重くて怖い、自分を縛る鎖のようなものでした。結婚願望も全然持てなくて。そんな私が、彼女と「結婚」というかたちで共に生きているというのもなんだか不思議な話です。確かに、彼女との生活ですごく成長できている実感があるし、両親の言っていたこともある意味では当たっていたのかもしれません。もっとも、両親はいまだに、私と彼女の関係を受け入れてくれませんけれど。

出会って10周年の記念の年に、ふたりでカナダ旅行に行って、法律婚してきました。カナダでは同性婚が法制化されていて、外国人旅行者でも手続きすれば結婚証明書がもら

えるんですよね。日本国内で法的に意味を持つわけではありませんが、やっぱり感慨深いものがありました。

カナダで結婚手続きをして驚いたのが、同性婚が特別なものではなく、ごく当たり前のものとして受け入れられていたことです。友達のカナダ人女性カップルがエスコートしてくれたのですが、近所の人に会うたび「このふたり日本から来てね、さっき結婚したのよ!」って紹介してもらって。そうしたらみんな「素敵!おめでとう!」って、何の違和感もなく祝福してくれて。女同士だからどうこうとかそういうのは全然なくて、あくまで結婚そのものを純粋にお祝いしてくれるかんじだったんですよね。特別じゃなくいられること、オープンでいられることがこんなにもラクなことなんだって、肌で感じて本当にびっくりしました。

そして実感したのが、制度ってやっぱり大事なんだなって。制度があることで、こんなにも人の感覚が変わるものなのかなって。

今の日本では女同士男同士で法律上の結婚はできません。だからたとえば私が彼女に理不尽に別れを突きつけられても、私は法律上の妻と同じように補償を求める事はできない。不公平だなって思います。

結婚制度って、ふたりの関係が壊れたときのためにこそ必要だと思うんです。たとえば別れることになったとき、弱い立場の人たちがちゃんと守られるように。今の私は制度を使えないから、何かあったときのためにも自分でしっかり働いて稼いで、自立しておかないと、っていう気持ちは、やっぱり強くありますね。

とはいえ、今は私も彼女も元気で仕事に打ち込んでいますが、これから歳を取っていけば、身体も心も衰えてきます。結婚してもおたがいしっかり自立するのが大事だとは思いますが、この先それができなくなったとき、いかにうまく依存し合うか。長年積み重ねてきた関係の上で、人生の苦しいときにふたりがいかに支え合うか。もしかしたらそれこそが「結婚」というもののかもしれません。そんなことを最近では思っています。



写真提供：non

結婚は「当たり前」じゃないから

小野寺 真（おのぢらしん） 1977年生まれ 宮城県仙台市出身・在住

インタビュー実施日 2025年4月17日 聞き手 MEME

ひとつ年下の妻とはバスケットボールを通じて知り合いました。妻が所属していた大学のバスケットボール部に、私がコーチとして行っていたんです。告白は彼女の方からでした。私も、私にはないまっすぐで天真爛漫な魅力を持つ彼女に惹かれていき、付き合うことになりました。でも、それからずっと順調に付き合ってきたわけではなく、実は数年後に一度振られています。理由は私が、自分の性別のことでの悩み、後ろ向きに生きていたからでした。

私は女性として生まれましたが、小さいころからずっと、自分のことを男性だと思っていた。でも当時は、性同一性障害—今は性別不合と呼ばれるようになっていますが—とかトランスジェンダーとか、そんな言葉は聞いたこともなくて。自分の存在を否定され、自信が持てず、未来をイメージできませんでした。女性扱いされるのが嫌で仕事を転々としたり、差別的なことを言われ、傷ついては死を考えたこともあります。

彼女ともきちんと向き合わずに「どうせ俺なんてダメな人間だ、生まれてこなければ良かったんだ」なんて思っては、マイナス思考で後ろ向きなことばかり無意識に口にしていて。とうとう彼女に「人のせいにばっかりして、いつまで悲劇のヒロインでいるの？」って言われて、振られてしまったんです。

今にして思えば、彼女も辛かったんでしょうね。誰にも言えない関係で、彼女も嘘をついて私と付き合っていましたから。まわりから「彼氏いないの？」と聞かれたら、名前も性格もすべて嘘の架空の彼氏をつくって、話を合わせたりしていたんです。そして、そんなことをしているうちに、同年代の友人たちが結婚、出産し始める時期になって、焦りや不安もあつたんだと思います。

彼女に振られたショックの中で、私ははじめて、自分が自分の人生について、未来について、真剣に考えたことがなかったのに気づきました。「どうせ何をやっても女性として扱われるんだ

と思ってばかりで、夢や希望を描けなかった。どうせ死ぬなら、自分が将来どう生きていきたいのか、一度ちゃんと考えてみよう。そして行動してみよう。そう思ったんです。

最初の行動は、家族や友人へのカミングアウトでした。正直、当たって砕けろみたいな気持ちだったのですが、子供のころから男っぽかったし、みんな、なんなく察してはいたみたいでしたね。「性別関係なくあなたはあなたでしょ」と言ってもらいました。一番嬉しかったのは、「話してくれてありがとうね」と言われたことです。ずっと、こんなこと話したら嫌われて、みんな離れていくと思っていましたから。歳を重ねた今になって思うと、一番自分を偏見の目で見ていたのは自分だったかもしれません。勇気をもらい一歩踏み出せるようになって、景色も一変しました。もともとプラス思考な彼女に引っ張られるように、私のマイナス思考がプラス思考に変わったんだと思います。

そして、そのカミングアウトがきっかけになり、別れた彼女とひさしぶりに話をする機会が訪れました。

そのころ、彼女も彼女なりに、いろいろ悩んでいたんです。まわりの友人たちみたいに、男性と結婚して子供を産む将来もあるんじゃないか、とか。苦しかったと思います。

なかなか未来を描けないふたりでしたが、でも、やっぱり一緒にいたい。おたがいそう思つたんです。振られて1年後により戻すことになりました。

そして仕事も心機一転、新しい理容室に入店して修行に励むことになりました。

実家が理容室だった関係で理容師免許を取っていたのですが、女性として扱われるとき身が入らず、長続きしなくて。でも、このタイミングで真剣に向き合ってみることにしたんです。早く一人前になりたくて、彼女との未来を描きたくて頑張りました。

そこで出会った理容の師匠との出会いも大きかったです。私の人生を教えてくれました。カミングアウトのあと、男性として働きたいと思った私は、面接で男性として雇って欲しいと伝えたんです。でも師匠は、性別のことばかり気にする私に「性別も大切だけど、まずは人として、理容師として成長するのが大切じゃないか?」って言ってくれて。師匠の友人であるゲイやレズビアンの方々も、そうやって生きていくすべてを自ら築いていると教えてくれました。

より戻したばかりのころ、彼女との養子縁組を検討したことがあります。

戸籍上は女性同士だったので、法律婚はできません。代わりに養子縁組で法律上の

家族になるという方法を、どこかで聞いたことがあって。そうすれば相続などがスムーズにできるようになるし、ふたりの繋がりが、親子という関係とはいえ明確になるので安心だなと思って、まずは私ひとりで区役所に相談しに行ってみることにしました。

そうしたら窓口の人に「どのような養子縁組ですか?」って聞かれて。ケースによって必要書類などが違ってくるみたいなんですね。でも私はそんなことも知らなかったからびっくりしてしまって。ここでもカミングアウトしなきゃならないのかと、下を向いたまま黙り込んでしまいました。

すると、そんな私に、窓口の人がそっと、紙とペンを差し出してくれたんです。それに事情を書いて渡しました。自分は性同一性障害であること。戸籍上同性のパートナーと家族になるために養子縁組を検討していること。窓口の人は余計なことは何も言わず察してくれて、書類を持ってきて説明をしてくれました。「何かあったら相談してくださいね」とも言ってくれて、感謝で涙があふれました。とても安心しましたし、本当にありがとうございました。

でも結局、養子縁組をすることはませんでした。まだ心の準備ができていなかったというのもありますが、何より私がまだ見習い理容師で、稼ぎもろくになかったので。私は形式的なことにはばかり目を向けて焦っていたようなところがありました。彼女は、自分たちが人と違う不安定な関係だからこそ、まずはおたがいしっかりと自立することが重要だと考えていました。「今はまだそういうことをするような状況じゃないんじゃない?」って言われて。確かに、彼女はバリバリ働いてしっかり貯金もしていたのに、私はずっとフラフラしていて貯金もなかったですし、当時はデートでも彼女に奢ってもらひっぱなしでしたからね。早く彼女に恩返ししなきゃと思って、仕事に精を出す日々が続きました。

ちなみに、一度養子縁組をすると、離縁したとしても相手ともう一生結婚できなくなってしまうということは、あとになってから知りました。なので結果的には、養子縁組をしなかったそのときの選択は間違っていたということになりますね。

一緒に暮らすようになったきっかけは東日本大震災です。自宅が被災して住めなくなってしまって。だったら新しく家を建てて、一緒に住もうという話になりました。

一緒に住むって決めたとき、自分たちの気持ちを示すものが欲しいなと思って、つくったのがオリジナルの「共生届」です。これからも共に生きていきましょう、という思いを込めて、婚姻届の様式を手直ししてつくりました。証人の欄には友人夫婦にサインしてもらって、それ

を額に入れて、新居に飾っていました。もちろん公的なものではありませんが、戸籍上女性同士で法律婚はできないし、せめてふたりの約束をかたちにしておきたいと思ったんですよね。

そうこうしているうちに、時代はどんどん変わってきました。2004年に「性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律」が施行され、一定の要件を満たせば戸籍上の性別を変更することができるようになり、性別適合手術も、日本国内でも受けやすい環境が整っていきます。

彼女と暮らし始めて数年後、私も、性別適合手術を受け、戸籍上の性別を男性に変更することを決断しました。彼女は最初、私の身体への負担を心配して反対しましたが、私はやっぱり男性になりたかったので。いろいろと安心材料になるような資料をそろえて説得して、最終的には納得してもらいました。

戸籍上男女になることで、これまで無理だと思っていた法律婚ができるようになりました。妻は「棚からぼたもち」だとよく言っています。本当に、結婚できるようになるだなんて、ふたりともまったく思っていませんでしたからね。

婚姻届を出すかどうか、出す場合苗字はどうかなど、ふたりでいろいろ話し合い、妻が苗字を変えるかたちで婚姻届を出すことに決めました。「共生届」にサインしてくれた友人夫婦にまた証人になってもらって、ふたりのラッキーナンバーにちなんだ記念日に、婚姻届を区役所に提出しました。

婚姻届を出したあと、ささやかながら友人たちの協力のもと結婚式のようなパーティーも開催しました。妻は実は結婚式への憧れが強かったみたいで、法律婚ができることになつてすぐに結婚情報誌を買ったりしていました。そんな妻の姿を見て、ああ、やっぱり言わなかっただけで、我慢していたことがたくさんあったんだろうな、と感じましたね。正直なところ、私は結婚式には関心がなかったのですが、妻の喜ぶ顔を見られたし、お世話になっている人たちに感謝の気持ちを伝えることができたので、やって良かったと思っています。会場の担当者の方が、私たちの事情を汲んで親身に対応してくれたのもありがたかったです。

子供のころは、結婚とか結婚式なんて、向き合いたくない現実でしかありませんでした。

自分がお嫁さんになる、男性と結婚するだなんて、まったく考えられませんでしたし。友人の結婚式に参列しても、お祝いごとで嬉しい反面、「自分はあっち側には行けないんだな」と、どこか冷めた目で見てしまっているところもありました。

ご祝儀も払うばかりで、もらうことなんかできないんだなと思っていたのですが、そんな私もお祝いしてもらう側に立つことになったのだから、人生分からぬものですね。

結婚したからといって、ふたりの日常生活に特段の変化はありません。とともに一緒に暮らしていましたしね。ただ、妻が病気になって入院したとき、夫として病状の説明を受けられたのはやっぱり安心感がありました。法律婚するってこういうことなんだなと思いましたね。

とはいって、正直なところ、結婚することの法律的な意義を自分がちゃんと分かっているかというと、あまり分かっていないと思います。教わる機会もなかったですし。それより自分が意識してしまうのは、やっぱり世間体というか。「男たるもの結婚して一人前」みたいな古い価値観がどうしても、小さいころから刷り込まれてしまっているんですよね。頭では「結婚するもしないも個人の自由で、どっちが偉いなんてことはない」って分かっているんですけど。でも、たとえば差別的なことを言われたときなどに、「俺は結婚したんだぞ!これでどうだ文句ないだろう!」なんて言いたくなってしまう自分に気づくことがあって、自分で自分が怖いなと思います。

法律婚にはたしかに安心感がありますが、その安心感には危うさもあると、妻とはよく話します。していないときは、要するに赤の他人ですから、その分ふたりで足並みをそろえて、未来に向かって頑張っていこうという意識が強くなります。それが法律婚することで、気が緩んで未来を見失ってしまうこともあるのではないかでしょうか。

特に私たちの場合、私が“元女性”であるという過去は一生ついて回ります。結婚して、一緒に暮らしていることは決して当たり前じゃないんだ、ということは、妻も私も常に意識していますね。何事にも感謝を忘れず、日々切磋琢磨しながらふたりの時間を過ごしています。



写真提供：小野寺 真

てつがくカフェ「結婚の定義」全5回をふりかえって

文：てつがくカフェ @せんだい

てつがくカフェシリーズ「結婚の定義」は、結婚というテーマを多角的に捉えなおし、その意味を再考することを目的に、全5回にわたって開催されました。このイベントは、2022年からメディアスタディーズ「結婚の定義」に取り組んでいる「♀×♀お茶っこ飲み会・仙台」さんとの協働で実現しました。

各回ごとに異なるテーマを設定し、多様な視点から結婚について深く対話を行いました。テーマには「結婚と制度」「結婚と恋愛」「結婚と子ども」などがあり、幅広い意見や疑問が交わされました。参加者は、テーマに関心を持って参加した人や通りすがりに立ち寄った人まで様々で、年齢やバックグラウンドも多岐にわたりました。集まった方々とその場で結婚について対話を重ね、考えを深めていきました。

印象的だったのは、参加者がそれぞれ自分の経験と照らし合わせながら考えや疑問を出していったことです。結婚に関して普段はあまり捉え直すことがなくとも、この場で対話を進めるうちに、なんとなくもやもやと感じていたことが言葉として出てきたり、思いもよらなかった疑問にぶつかりう~んと唸って考えたり。今まで当たり前だったり曖昧だったテーマだからこそ、掘り下げるとなかなか難しいものでした。そんな中、賛否が分かれる意見や自分とは異なる見方にも耳を傾ける場にできたことは本当に良かったと思います。

また、「♀×♀お茶っこ飲み会・仙台」さんからは海外の事例や歴史など、対話のヒントとなるような例が提供され、それが参加者の視点を広げ、考えを深めるきっかけになりました。結婚の制度やありように対して、新たな視点を取り入れつつ、自分の考えを深める場として、非常に有意義な時間を共有することができました。

1年間にわたる「結婚の定義」に関する対話イベントは、現代における結婚の多様な側面を考え、理解する貴重な機会となりました。参加者の皆様、「♀×♀お茶っこ飲み会・仙台」さん、「せんだいメディアテーク」の皆さんに心より感謝申し上げます。

てつがくカフェシリーズ「結婚の定義」各回の概要

第1回：結婚について

2023年6月25日(日) 14:00–16:30開催

コロナ禍以降、4年ぶりの対面でのてつがくカフェとなつた初回は、若い世代から年配の方まで約30人が参加しました。参加者は多様な結婚観を自由に語り合い、結婚の意味や社会的圧力、結婚生活のストレスと幸せ、法的な結婚と非公式な結婚など多岐にわたる話題が共有されました。制度外の結婚や同性婚、障害者同士の結婚、職場での結婚話のハラスメント問題など、結婚を取り巻く多様な問題が浮き彫りになり、次回以降のテーマ設定に繋がる多くのキーワードが提示されました。



てつがくカフェとは？

わたしたちが通常当たり前だと思っていた事柄からいってん身を引き離し、「そもそもそれって何なのか」といった問い合わせを投げかけ、ゆっくりお茶を飲みながら「対話」をとおして自分自身の考えを遡りくすことの難しさや楽しさを体験していただこうとするものです。

第2回：制度としての結婚 2023年8月13日(日) 14:00–16:30開催

第2回目は「制度としての結婚」をテーマに対話を行いました。結婚制度は国や社会によって異なること、法制度やイエ制度の多様な範囲、制度外の結婚形態も存在することが話題となりました。また、結婚に必要な個人的・社会的な余裕や、逆に余裕がないから結婚するケースについても意見が交わされました。結婚制度には縛りや責任が伴う一方、関係性を説明する手間を省く役割もあるとされ、「枠組み」や「ラベル化」などのキーワードが導かれ、結婚制度の多様な意味が見えてきました。

第3回：制度外の結婚 2023年10月8日(日) 14:00–16:30開催

第3回目は「制度外の結婚」をテーマに対話を行いました。近親婚、未成年者との結婚、異類婚（キャラ婚やペット婚など）や事実婚、複婚、死後婚などが例として挙げられ、それぞれが何を求めていたのかについて考えていました。そこから、なぜ結婚という社会的認知を求めたいのかや、概念と結婚する意味について意見が交わされました。また、制度についても言及され、制度は適切に作り直していくことで、自由を尊重する形に拡張できるという意見も出されました。

第4回：恋愛と結婚 2023年12月24日(日) 14:00–16:30開催

第4回目は「恋愛と結婚」をテーマに対話を行いました。恋愛における強者と弱者の存在や、感情と性愛の必要性について意見が交わされ、恋愛結婚を捉え直していました。また、一夫一婦制の恋愛結婚が嫉妬や独占欲を生む可能性や、ポリアモリー（複数愛）や友情結婚の可能性について話されました。恋愛と結婚に関するキーワードとして「信頼」「健全な関係」「ゲーム性」「排他性」などが挙げられ、結婚の内在要素を考察していました。

第5回：結婚と子ども 2024年2月11日(日) 14:00–16:30開催

第5回目は「結婚と子ども」をテーマに対話を行いました。結婚制度に「子ども」が結びつく理由や、子どもを産むことが推奨されることへの違和感が取り上げられ、安定した制度を作る難しさが浮き彫りになりました。また、結婚や子どもを持つことへのハードルや、男女の身体性の違いが制度にどう影響するかが話し合われました。キーワードには「自由を失わせる力」「個人」「社会」「多様性」「生殖補助医療」などが挙げられ、さらに考えを深めていました。

コラム

永続的な精神的及び肉体的結合を目的として
真摯な意思をもって共同生活を営むことについて

文：MEME

「永続的な精神的及び肉体的結合を目的として真摯な意思をもって共同生活を営むこと」

なんのことかお分かりでしょうか。

いわゆる同性婚訴訟の判決文で各地の裁判所が示している「婚姻の本質」です。

「肉体的結合」とはついぶん生々しい表現ですが、要するに「婚姻＝セックス」ということですね。今の日本の法律では、そういうことになっています。

同性婚法制化推進運動は、世間では「家族になるのに性別なんか関係ないじゃない」みたいなほのぼのとした解釈をされがちだったりしますが、実際にはそうではないんですね。「婚姻＝セックス」→「同性愛者は同性としかセックスしたくない」→「だから同性婚が認められないのは同性愛者に対する差別」という論理です。

でも、これは考えてみると不思議な話です。

どうして、セックスする関係だけそんなに特別扱いされなきやいけないんでしょう？

男女だったらセックスする→子供ができる→できた子供を育てる、という流れがあるから分からなくもないですが、同性婚論議では当然ながらセックスと子作りは切り離されているわけです。さらにいえば、そもそも男女にしたって、避妊法や生殖補助医療の普及でセックスと子作りは相当程度切り離されているのが現状です。

それなのにどうしてなんでしょう？

セックスをしなくとも、ただ支え合って助け合って暮らしているというだけでは尊重してもらえないんでしょうか？

誰ともセックスしたくない人や、誰にもセックスの対象として見てもらえない人は除け者なんでしょうか？

そんなこんな、いろいろと不思議な本邦の「婚姻の本質」ですが、婚姻に関する世論が盛り上がる中にあっても、この「本質」が表立って話題になっているのをほとんど見かけないのがこれまた不思議です。

昨今流行りのいわゆる自治体パートナーシップ制度でも、貞操義務やセックスに応じる義務を制度の中で規定しているところなんてほぼありません。「婚姻の本質」の重要な要素である「肉体的結合」が無視されてしまっているわけです。

いったいどうしてなんでしょう？

どうしてこんなにみんな、「婚姻の本質」から目を逸らしたがるんでしょう？

もしかしたら、多くの人たちが、そんな「本質」を、どこかおかしいと思いつつ、それでも求めているからなのかもしれません。

あからさまに白黒つけられないというか。白黒つけたくないというか。

婚姻の本質を見つめることで見えてくる、そんな矛盾だらけの世界。

それこそがまさに、婚姻の本質なのかもしれません。

矛盾を抱きしめながら私たちは、どこに転がっていくのでしょうか？

結婚ではないなにか

文：MEME

コラム

結婚に似ているけれど、結婚ではないもの。

海外ではそんな制度が増えています。

有名なのがフランスのPACS（連帯市民協約）。もともとは法律婚したくてもできない同性カップルのために導入された制度ですが、法律婚よりも気軽に利用できるとあって異性カップルの利用が激増。2022年には異性カップルの法律婚件数約23万件に対しPACS利用件数約19万件と、法律婚に引けを取らないほどになり、性別関係なしに法律婚ができるようになった現在でも廃れることなく、すっかりフランスに定着しています。

今の日本では、夫婦別姓や同性婚の法制化推進運動など「今ある婚姻制度はしつこいから変えよう！」という動きは盛んですが、「今ある婚

姻制度はしっくりこないから新しい制度をつくろう!」という動きは目立ちません。

みんな、今ある婚姻制度に基本的には満足しているということなのでしょうか。それとも、「結婚ではないなにか」という選択肢があり得るだなんて、思ってもみないのでしょうか。

「太陽の塔」で有名な岡本太郎と秘書の敏子は、法律婚できる間柄の成人男女でしたがあえて養子縁組を選んでいました。

あるいは事実婚だったり、もっとオリジナルな共同生活だったり。法律婚に違和感を持ち、利用可能であってもあえてそれを選ばない人たちは、日本でも実は少なくありません。

昨今日本で広がりをみせているいわゆる自治体パートナーシップ制度も、性別や性のあり方にかかわりなく制度利用できる自治体が増えています。たとえば神奈川県横浜市。2025年3月末現在の制度利用者カップル全514組のうち、戸籍等公的書類上異性のカップルは188組と、1/3超を占めています。法的保障が伴わず理念的なものにとどまるといった点でPACSなどとは全く趣旨が異なるものではありますが、それでも婚姻制度に違和感を覚える男女のカップルにも喜ばれているなど、新たなニーズの掘り起こしにつながっているといえるのかもしれません。

そう考えてみると、日本でも「結婚ではないなにか」の需要はそれなりにあります。しかしそもそも、「結婚」と「結婚ではないなにか」の間の線引きって、いったいどこにあるんでしょう？

もっといえばそもそも、フランスと日本の「結婚」が大きく異なるように、「結婚」も1種類だけとは限らないのかもしれません。

日本でたとえばもしPACSのような制度ができたとして、それは「新しい結婚のかたち」なのでしょうか？それとも「結婚に似ているけれど結婚ではないもの」なのでしょうか？

「結婚」って、そもそもいったいなんなのでしょうか？

MEME（めめ） 1980年生まれ、宮城県出身・在住。アロマンティック（恋愛感情なし）でバイセクシュアル（女も男も性的対象）でノンモノガミー（1対1の性愛関係にとらわれない）でFtX（女として産まれ、性自認が女でも男でもない）。女郎蜘蛛魅涙（じょろうぐもみさえ）という芸名でドラマグクイーンとしても活動している。♀×♀お茶っこ飲み会・仙台代表。

第2章 「結婚指輪」

結婚指輪の魔法

文：キャシー

J・R・R・トルキンのファンタジー小説『指輪物語』に登場する指輪には、身に着けた者が物理的な領域から精神的な領域へ部分的に変移する能力が秘められている。生きている人間のような物理的な存在からは見えなくなり、幽鬼のような精神的な存在からはよく見えるようになるそうだ。

結婚指輪にも、どこかこれに通じる“魔法の力”があるように思う。

既婚者が不倫や浮気をするとき、“結婚相手がいる世界”から自分の姿を消すために指輪を外してみたり。逆に指輪を着けたままの方が興奮するという人もいるのかもしれないが。

そして結婚指輪は“バリアの魔法”も発揮する。結婚指輪を身に着けている人からは、「私を好きになるなよ」という脅しめいたアピールを感じてしまうのだ。

独り身の私の場合、「あの人いいなあ」と思うと同時に、無意識に目で指輪を探してしまう。そして左手の薬指に指輪を発見しては、「ああ、やっぱりね。こんな素敵な人は誰も放っておかないか。好きになんでもどうしようもないな」と考え、そこで無理やり好きになることを止めてしまう。指輪ひとつに振り回されて、勝手に失恋する。そんな繰り返しだ。

また、対外的なものだけでなく、身に着けている本人に働く魔法の力もあるのではないかだろうか。

たとえば、「この人と別れたい」という気持ちが強くなった日。でも今はまだ子供が幼いし、別れた後にひとりで暮らしていくかな、親にはなんて言おうかなど、心は揺れる。そんな時、ふと指輪が視界に入る。これまで指輪とあなたが共に経験してきた思い出や出来事が走馬灯のように駆け巡る。「もう少し頑張ってみようかな……」そんな風に、指輪が別れを踏みとどまる力を与えてくれることもあるだろう。

指輪を眺めることで、2人の幸せだった時間を振り返ったり、楽しかったデートを思い出してにやけたり、素敵な時間に浸れたり。指輪には恋という魔法を強めてくれる力もあるのではないかと思う。

あるいは、喧嘩したときに怒り狂い、指輪に怒りを込めて遠くへぶん投げてみたことがある人もいるだろうか。イライラした気持ちを一時的に身体から遠ざける、指輪を投げるという行為により一時的に清々しい気持ちになれる力もあるのかもしれない（投げた指輪を後で探すのは大変そうなので、場所を考えながら投げることをおすすめします）。

『指輪物語』に登場する指輪には、

一つの指輪は全てを統べ、
一つの指輪は全てを見つけ、
一つの指輪は全てを捕らえて、暗闇の中に繋ぎとめる。

という言葉が彫られている。なんと恐ろしく一方的なメッセージだろうか。こんな指輪を着けたらきっと呪われそうだし、幸せにはなれないだろうな。

結婚指輪は、結婚の約束と同意のもとでお互いに着け合うことから始まる。『指輪物語』に登場する指輪のように一方的な思いが込められているわけではない。指輪を着けるその瞬間、お互いが見つめ合い、思い合っていることが大切であるように思う。

そして、その後の結婚指輪を着けるか、着けないかの判断や、気持ちが途切れたときに外すタイミングは個人の自由に任せられる。すでに自由を得た人や、無償の愛を知っている人たちには、指輪そのものの存在や指輪の力はもはや必要ないのかもしれない。

あなたにとって結婚指輪は必要ですか？

キャシー 1977年生まれ、宮城県出身・在住のMtX（男として産まれ、性自認が男でも女でもない）。ノンケ男子ばかりを好きになる永遠の片思い中。インタビュー記事『40代独身、農家の長男』にも登場。

左手薬指を取り戻す日

文：MEME

結婚指輪という風習を憎んでいる。

左手薬指という、(右利きの人間にとっては)指輪着用にとても適した指を既婚者たちに奪われているからだ。

もちろん、別に独り者が左手薬指に指輪を着けることを禁じる法律があるわけではない。やりたければやれば?と言われれば確かにそのとおりなのだが、それで「恋人できたの?結婚したの?」だのなんだの囁き立てられると思うと考えただけでも面倒で、なかなか踏み切れない。

衛生管理が重要とされる職場などで「指輪禁止、ただし結婚指輪のみ可」という規定があったりするのも納得いかない。結婚指輪だろうがそうでなかろうが、同じ指輪なら衛生面では全く変わりはないはず。なぜ結婚指輪だけ許されるのか?「シンプルな指輪1個のみ可」とかすれば良いじゃないか。こんなの婚姻特権以外の何物でもない。

既婚者たちはさも当たり前のような顔をして、左手薬指という「一等地」を占領している。子供の頃からそれがずっと悔しかった。「お嫁さん

になりたい」だなんて一秒たりとも思ったことのない私は、「一等地」から排除され続けるのだ。

だいたい、ただペアリングしたいだけならどの指でも良さそうなものだ。なぜ「既婚者専用」の指を決めそこに着けるのか?

独り者がこぞって左手薬指に指輪を着け始めたらどうなるのだろうか。革命である。奪われ続けた左手薬指を取り戻すレボリューションである。

もしそうなったら、既婚者たちはどうするのだろうか。

他のどこかにまた、自分たちの特別な場所を見出すのだろうか。

ちなみに結婚指輪、国や文化によっては別の指に着ける場合もあるらしい。

日本の場合、古来の伝統でもないのに結婚指輪の風習がここまで爆発的に広まったのは、「一等地」の左手薬指に着ける設定だったからこそなのかもしれない。

独占できなくなってしまった「一等地」にとどまり続けるか、独占できる他の場所に移るか、革命の果てに広がるのは、どんな世界なのだろう?

結婚指輪を外してみたら

文：創

適合手術を受けた(当時は戸籍の性別変更のために性別適合手術が必須だった)。

性別変更を終えて先方の実家への“ご挨拶”を済ませ、婚姻届だけを先に出したが、お世話になった人たちに報告がしたくて、改めて披露宴のようなパーティーをすることにした。

そのパーティーよりも前に、ドレスや着物での写真撮影をする「前撮り」があった。その前撮りまでに結婚指輪を用意することになり、急ぎお手頃な価格のものをそろえているブランド直営店にパートナーと出かけた。身体のベースが女性だから、男性用のサイズが合わなくて「バレるのでは」と冷や汗をかいたが、特別訊かれたりはせずに女性用のラインナップから作成してもらうことになり、何とか無事に結婚指輪を手に入れることができた。

チャペルでの撮影の際に、結婚指輪を交換して互いの左の薬指にはめた。そのときはちょっと感慨深かったが、撮影もパーティーも終えて日常生活に戻ると、そのうち指輪をしているのが当たり前になり、いつの間にか馴染んでいった。

それ以来、僕はほぼ結婚指輪をつけっぱなしだった。パートナーは仕事柄外していることが多かったが、それは別段気にならなかった。結婚という制度が目には見えなくても確かに効力を持つのと同じように、それはいつも目の前にな

かったとしても、「約束の象徴」として持つてさえいればいいものだと思っていた。

まあ僕の方は仕事に差し支えないし、邪魔でもないし、外さなければならない理由はない。何となく、僕は指輪をしたまま毎日の生活を続けていた。

ところが、2023年の秋、転機が訪れる。

結婚して、もうすぐ10年。新型コロナウイルスの流行による自粛生活をきっかけに体重が増え続けていた僕は、ふと左手の薬指に異変を感じた。いや、指輪を外していくなとは思っていたのだが、何もしていないときでも少し痛みを感じることが出てきたのだ。

調べてみると、どうやら指輪がきつくなっただらしい。そりゃ体重も増えれば指だって太くなるよなと、一念発起してダイエットをすればいいのだが、「たしか一回はお直し無料だったな」と思い出した僕は、自分ではなく指輪のサイズの方を変更することにした。

購入したお店は地元から撤退していたのでメーカーに直接問い合わせすると、お直しの内容を記入して保証書と一緒に送れば修理してくれるという。

痛みを感じるようになったときから既に指輪は外していたが、忙しいからと送るのをずるずると後回しにした結果、修理期間と合わせて5ヶ月くらい結婚指輪をせずに生活することになった。

持つてさえいればいいと思っていた結婚指輪だったが、いざ外して生活してみると、思いがけず落ち着かない場面に遭遇した。

特に、女性と接するときである。

おそらく一般男性に見えるであろう自分は、仕事でも普段の生活でも、接する女性になるべく不安や不快な思いをさせないようにしなければとどこかで思っている。生まれながらの男性ではなくとも、相手の女性から見たら「男性」なのだから。

そこで気付いた。僕は、結婚指輪に頼っていたのだと。

例えば居酒屋なんかで女性グループで飲んでいると、隣の席から知らない男性たちが声を掛けてきた。結婚式の二次会で新郎の友人の独身男性が新婦の友人女性たちのところに来て、自分アピールをし始めたり、次回に繋げようしたり。パートナーの有無をさりげなくチェックされたり。

それらは、僕が女性として生活していた頃に、身をもって体験したことだ。

声を掛けてくる側にとっては貴重な出会いの場なのだろうが、女性たちの中にはそれを嫌がる人が少なくなかった。もちろん僕も嫌だった。そういう体験があったから、独身の男性が女性と接するときは特に、距離感に気をつけなければならないと感じているのだ。

僕は仕事柄、女性のお客さんと二人きりになることもある。結婚指輪をせずに接客していると、距離の取り方に迷って緊張してしまう自分がいた。僕は知らず知らず結婚指輪に「既婚者ですよ」「パートナーがいますよ」というメッセージを代弁してもらって、多少なりと相手が警戒しなくて済むような雰囲気をつくっていたわけだ。

なんて便利なのだろう。

それだけではない。僕は普段自分がトランスジェンダーであることを伏せているが、プライバシーが守られる場では、LGBTQについての研修会などで当事者としてお話しすることがたまにある。その際にも、結婚指輪に頼っている部分があると気付いた。

世の多数派の人たちが利用できる、結婚という制度の枠組みの中に自分も入っていることで、受け入れられやすいように感じているのだ。

多数決を是とする時代に育った僕にとって、多数派であることは、肯定される安心感を伴う。逆に言えば、少数派であるということは、それだけで否定されるという、大きな不安を抱えることにもなる。

結婚指輪は、少数派である僕を部分的に多数派に見せて、安心させてくれるものでもあったのだ。

もはや僕にとって、結婚指輪は単なる「約束の象徴」ではなかった。タンスにしまっておいていいものではなかった。もう手放せない便利アイテムであり、肌身離さず身につけていたいお守りなのである。

こんなに依存性の高いものだと、チャペルで指輪を交換したあの日には思いもしなかった。

年が明けて、ようやく修理が終わった結婚指輪が戻ってきた。磨き直され、一回りサイズアップした指輪。裏側の刻印を見る。間違いない僕のものだ。

ほっとして、再び左手の薬指にはめる。ああ、これだよこれ。サイズもちょうどいい。やっと落ち着いた。もう相手にどう思われるかいいち不安に思わないでいい。心が軽くなり、ウキウキすらした。

そして同時に思う。僕のこの感覚は、僕が受けてきた教育や育った環境によって与えられ、無意識に身についてきたものだ。それは本当は、すごく不自由なことなのではないかと。

結婚も、結婚指輪も、愛する人のあり方は、ひとそれぞれの価値観で選べたらいい。これがないと生きづらいなんて思わなくていいようになるのが、一番の理想なのだ。

僕はそんな風に思う。あなたは、どうだろうか。

創(そう) 40代男性、青森県在住。



〈ミニ展示〉あなたの「結婚指輪エピソード」教えてください!

期間：2024年6月1日(土)～6月30日(日)9:00～22:00 ※6月27日(木)は休館日

場所：せんだいメディアテーク 1階エレベーター横

結婚指輪に関するエピソードや思いを問うメッセージ募集展示を実施しました。

現代日本においては、既婚者が左手の薬指に結婚指輪を着けることがごく一般的な風習となっています。しかしこれはよく考えてみると不思議なことです。なぜ「結婚している事実を示すし」を身にまとい周囲に知らせるのでしょうか?一方で最近では「結婚しているかどうかはプライバシーだからむやみに知られたくない」という考え方をする人も少なくありません。

そもそも現状、法制度の上でも結婚は「公にされるのが当たり前のもの」として扱われている面があります。たとえば海外では、カップルの婚姻の事実が役所に貼り出され公示される国々も存在します。また、現代日本においても婚姻届提出の際には証人が必要とされており、婚姻当事者だけでは手続きができないしくみとなっています。これはなぜなのでしょうか?結婚は当事者だけの秘密であってはならないのでしょうか?

そんな疑問から生まれた企画。期間中は多くの方々にお立ち寄りいただき、88枚ものフセンメッセージをいただきました。

結婚している人、していない人。結婚指輪をしている人、していない人。年齢も性別も性のあり方もさまざまな人たちからさまざまな声が寄せられ、この社会における、結婚指輪というものの、そして結婚というものの多様なありかたをあらためて実感する機会となりました。

いただいたメッセージ

- この展示を知るまで、結婚したら指輪を付けることは当たり前だと思っていた。確かに不思議な習慣ですよね。ハッさせられました。●新しい結婚指輪が欲しい!! ●してない。3年記念日でプロポーズしたいです。絶対成功させます。●私は学校で好きな子がいます。告白したいと思っていますが、OKされる力をください SOSたすけて●左手くすり指に指輪しての男性を見ると安心するのは私だけでしょうか…私は結婚してからプライベートだけつけてる。看護師の仕事に指輪は不要!! よごれちゃう!! ●シンプルな結婚指輪では、いやでこだわって決めた指輪で大切にしています。●夫は結婚式の時だけつけ30年たちますがそれ以来一度も付けていません。●私のパートナーと一緒に 同性のカップルです。だれかは「夫はいますか?」と言った。人々はしばしば思い込みをします。She is the love of my life. 彼女とずっと一緒にいたい ●私は、彼女を愛しています。I LOVE YOU! ●私たちは同性パートナーです! 今年の冬からカナダに引越しますが、いつかは結婚して指輪をつくりたいです。指輪をつくるorつくれないは自由ですが、私自身はとてもあこがれています。●大学生です。パートナーはいません。なんで指輪つけるんだろう、って考えて思ったのは、やっぱり自分たちの関係を認めてもらいたいから? 愛の最終的な形が結婚と考える人が多いからなのかな。●3つのダイヤが付いています。毎日、ふとした時にダイヤを眺めて、「キレイだな」と思います。夫との絆を感じます。ずっと付け続けます! 夫の事が大好きです♡ ●指輪は幸せの証! 一生を約束した証! ●一応記念にかけてみたものの、夫はしたくない派、私は仕事でジャマになるので数回しかつけず… タンスにねむってます。今の指にはまるのかな…とか考えてしまいますw ● セリースの指輪でしたが数年で変形してしまい、その後何度も買い替えてもらったけど、やはり変形。5個目くらいであきらめました。今は退職記念に贈られたカルティエのトリニティをはめています。まだ変形することなく… ●普段は付けっぱなしにしています。(プラチナなので温泉も大丈夫) 大きなけんかをした時に、怒りにまかせて指輪を投げつけたことがあります。あとになって自分で探したけどみつからず。でしたが、相手がみつけたあと小指につけてもっていました。仲直りしてまた指輪をつけてほしいといわれて、それまでの怒りがおさまりました。●していませんが好きな子はいます。しょうらい、けっこんすればダイヤの指輪がほしいです。●左乳がんを患い、転移していたのでわきのしたのリンパ節も切除しました。結果、指輪などリンパの流れをさまたげる物は身につけられません。少数派かもしれませんが、世間にはそんな人もいます。●「左手の薬指に結婚指輪をつける」母もつけていたし、キラキラしてキレイで無意識のうちに「あこがれ」となっていました。夫と結婚する事になった時、私は保育士、夫は建築士なので、高価なものをつけていても汚れたりキズがついてしまうかも、となり結婚指輪を手作りしました。

お互いのを作り合ったり、その様子を動画にしてくれるステキなお店を見つけました。とても良い思い出となり、弟にすすめたら、弟も結婚する時同じお店で作っていました。●いつか結婚指輪をプレゼントしたいと思えるような人に会いたい…(20歳／男性) ●両親のですが、私の記憶では2人ともほとんど指輪してることはありませんでした。たまに口げんかしているのをきくと、どうやら母が昔、無くしたようです。それをネチネチ言っている父にやだなって思います。●付き合っている頃に沖縄で「ミンサー」模様のことを知り結婚する時に「ミンサー」模様の指輪を売っている店を探して作りました。その過程も含めて楽しかったし、今も仲良しです!! 婚約指輪は作りませんでしたが一度きりのものだったので作ったらきっと楽しい思い出になっただろうと思います。●あまり人とかぶりたくない。私のわがままを叶えてもらう予定。ありがたいだいじにしよう そんなきもちになります。●おしゃれだから!! ●結婚前はあこがれていた指輪。婚約指輪は要らないから、結婚指輪だけは欲しいと懇願し購入してもらったにも関わらず私は結婚生活1週間目で指輪をつけなくなった。反対にあんなに指輪を渋っていた夫は今もずっと身につけている。指輪って何なのでしょうね ●ダイヤモンドのゆびわがほしいなあ～♡ ●とっても大好きな彼氏と遠距離恋愛をしています。(東京と仙台) そんなに頻繁に会えないためペアリングを買ってもらいつもお互いにています。やっぱりリングを見ると心が落ち着きますしにやにやしてしまいます。どうやら相手も同じようで買ってもらって本当によかったです。まだ結婚していませんが結婚したいですし結婚指輪もみたいです。でも今のペアリングも気に入っているので今のリングが左手の薬指につけられるようになるだけでもいいなと思っています。●大人だらうとかんけいなくびょうどうでオシャレでいいとおもう☆ ●自分はアクセサリをつけないし、妻は仕事上、リングはつけられないということで、結婚指輪は買いませんでした。お金の節約にもなるし…! ●私はしています!! 夫は外科系の医師のためしてません(付けてません)また、婚約指輪は研修医でお金がなかったためもらっていない。今からでもまにあります(笑) ●私は不要と思いましたが、義母が「いいやつを買ってもらひなさい!」と言うので、カルティエで夫に買ってもらいました! ●まだ子どもだから、分からぬいけど、学校に好きな子はいます。たまにしうるの事ももううしてしまうけど、ゆびわを、つける?!か、つけないのかは自由だと思う。子どもからでした。●結婚指輪…あんまりほしいと思ったことはないですね…。普通に高いし。それだったら何かおそろいのものを買うでもいいですよね。あと、結婚式に関する疑問が… しがない大学院生 ●相手が喜ぶからそれで良いのでは ●結婚指輪不要派でしたが、夫から「仕事中でも堂々身につけられるものが欲しい!」と言われ、2人で納得のいくデザインのものを購入しました。手元に届くのは2ヶ月後。今とても待ち遠しいです。●高い指輪を買ってもらったのに、数日でなくした…2回目(2個目)を買ってもらった。けど箱にしまってある… ●神前式で指輪の交換が必須と言われ、結婚指輪を買いましたが、そ

の時だけつけて、結婚30年近くになりますが、普段はつけていません。プラチナ!! 売ろうかな。●70才、男です。「三丁目の夕日」のあのワンシーン。当時、まさに、それでました。物より、心です。●婚約指輪をもらっていたので、それで満足していましたが、挙式の打ち合わせをしていて結婚指輪が必要なことが発覚! 普段はつけませんが、あわてて作ったのをつける度に思い出します。●ペアリングしかないから、結婚指輪をつけてみたい。●まだ結婚はしていません。する気もありません。男が結婚指輪を買うというルール無くしましょう。女が買え。働け。みづげやしなえ。俺を幸せにしろ。以上 ●授かり婚だったのでお金もなく予算1人2万円だったけど、試着したら着け心地の良いモノがあり結果1人10万円×2 予算オーバーを許して頑張ってくれた旦那に感謝♡一生大切にします♡ ●仙台の映画館で、初めて例の「給料の3ヶ月分…」のCMが流れた時、見てた観客は、皆ゲラゲラ笑ってたんだけどねえ…。今やすっかり昔からの規準みたいになってしまった。やれやれである。●このテーマ私もすごく思ってました。なぜ結婚はプライベートなことなのに社会的にそれだけ祝われ、指輪はオシャレとしてのかわいいのは仕事とかでダメなのに結婚指輪だけは許されるのかww意味がわかりません。結婚なんてプライベートで、公に祝ってもらうべきことでもないのに、何で堂々と社会的に認められる祝事なのか私には納得いかないです。結婚=祝事になってる=独身=祝われない人生? 意味不明です ●ふと指輪がぬけなくなると嫌なのでしません! ●結婚指輪にあこがれはあります。しかし着けるかと聞かれれば、着けないと答えると思います。理由はすぐ無くしそうだし、手を洗うときに邪魔だからです。なので普段もアクセサリーとして指輪は着けません。結婚指輪をついている人を見ると、無くさず長年つけていてすごいなと思います。●妻と鎌倉で手作りの指輪を制作しました。すごくかわいくて、これからもつけたいね。●高1のときガチャガチャでお揃いの結婚指輪をあてて、今でも持っています。●今はしてません…何でだらう?! ●結婚して夫が初めて出勤する朝に、「指輪は置いていくよ」と言いおもむろに外しはじめました。夫は発掘作業があったからでした。(仕事で)「じゃあ、私も外す」と言ったところ、「じゃあ、つけていくよ」とのこと。その後、一度も指輪を外すことはありませんでした。よかった♡ ●指輪ってずっとつけてるのになくしちゃう なんでだろう。サイズかなあ。結婚指輪をもらったら超気をつけないと…(もらえるとは言ってないって…) ●高校生のとき仙石線でチカンにあった。チカンが結婚指輪してて、奥さんいるのにこんなことするんだな、と思った。●先日、結婚し、結婚指輪をつけています。オーダーメイドで作ったため、作る過程も含め、思い出・記念になりました。何もしない・記念になることをしないのも個人の自由ですが、婚姻届を出す、指輪をすることで、区切り・けじめになり、私は一生この人についていこう、一生この人といっしょにいようと改めて思いました。●my love, my life. ●指輪します。主人がなぜか作りたいとだだをこねて私の要望です。ブランドがよかったです。●69才婆。8才年上の私。いまだに頂いておりません…

祝祭と日常を繋ぐ輪

文：MEME

心にしっかり記憶しているうちはいいですが…ね。●つけています。時々忘れるけど。つけていると、何となく安心できるので。きっと、ずっとつけていると思う。だんなのは、たんすの奥にしまいっぱなし。今度売っちゃおうかしらん。●しています。なんとなく 嫁にいろいろいわれてかうのにたいへんでした。●結婚30年!!太ってしまい指輪は残念な事にベンチで切りました 今は主人の指輪をはめています ●出会った時から夫の事が大好きで店員さんと2人で座をかけて強引に買った!笑 ふと自分の指を見て、本当に夫と結婚出来て毎日幸せだなあと実感…。毎日愛にあふれていて幸せです。●オトナってかんじ。いろんな意味で。●男ともだちが結婚指輪をつけ始めてから急にセクシーに見えた ●結婚しているときは、毎日つけていたけど…。1人になったときは、ただただ「嫌な気持ち」になるものに変わり即ゴミになりました。今は、衛生的にどうなんだ?と思ったりする…。●離れていても 指輪を見て あなたを想う。●ギャルだから!! ●ハリーウインストンでこの指輪を見たとき、絶対に奥さんに買ってあげたいと思いました。今あれから5年経ちますが本当にいつまでも美しく輝いています。●してません。ズボラでアクセサリー苦手だから…でもイタリア人の友人に「なぜしない?」と言われ安いの買ったけど…出産時病院で外して、そのまま行方不明…無縁 不要 人それぞれでOK 68才 ●結婚9年目です。ずっとつけています。時々外して、彫ってある2人の名前を見たりしています。買ってよかったです。●(一度もつけたこと無)結婚して半年くらいで…夫が(婚約指輪も…2ヶ勝手に質屋にもっていった。その金はなににつかわれたか不明(飲屋のツケ?)40年くらい前のこと。「物」(ツケ)でしかないです 指輪…今、金の値が上っているのでちょっとやさしい(笑) 68さい ●してない。彼氏はいます!昨日2年半記念日でプレスレットをサプライズで渡しました。いつか指輪もらえたらいいな~♡ ●自分は結婚していないけど、いいなと思う人が指輪をしていると、なんだかがっかり。なんだか残念。といった感じ。今さら手おくれとかどうしようもないとか負け犬感が強い気持ちがわいてきます。●夫婦でペアでつけられるものだから(しゅみ違いすぎてw) ●アイノシリシ♡ ●コロナで沢山手洗いをするようになり、不衛生かなと外していたら付けるのが面倒になり今はネックレスに付けています。●ベタですが、プロポーズをするときにサプライズで渡しました。指輪をつけてることで絆と妻を幸せにする気持ちを忘れずにいたいと思う。●毎日外出するにつけています。指輪についているキラキラしたダイヤを見るたび結婚式や結婚準備をしていた時の事を思い出して幸せな気持ちになれます! ●「人と被らない」と「有名なブランド」という難しい問いに直面しています。これもまた人生… ●子どもなので、まだけっこんしてないです。●いらない!?子どもだから!! ●してません 子どもだから!! ●今からです! (18さい)

2024年6月1日(土)–6月30日(日)せんだいメディアテーク1Fにて実施されたミニ展示「あなたの『結婚指輪エピソード』教えてください!」。

パネルにカラフルに貼られたフセンメッセージの数々を眺めていて、感じたことがある。

結婚指輪って、「祝祭」と「日常」を繋ぐ輪(リング)なんだなあ、ということだ。

結婚指輪の最初の出番といえば、典型的にはやはり、結婚式での指輪交換だろう。

結婚を決めたふたり(ふたりに限らない場合もあるが)が、こだわって選び求めた指輪を、祝福してくれる人たちの前で着け合う。実に晴れがましい瞬間である。

ウェディングドレス、ウェディングケーキ、ウェディングブーケ、そんな華やかでキラキラしたものたちに囲まれて、おろしたての指輪は左手薬指で輝くのだ。

しかし、結婚指輪にはウェディングドレスなどとは大きく異なる特徴がある。

結婚式という「祝祭」が終わり「日常」に埋没した後も、ずっと同じく左手薬指で共にあり続けるということだ。

ウェディングドレスを普段着にすることはまずない。本人たちでさえ、結婚式の際には普段しないようなヘアメイクであるで別人のような姿かたちになるというのに、結婚指輪だけは何一つ変わらない。「祝祭」を輝かせた後は、そのままの姿で「日常」に寄り添い続けるのだ。

それ自体何も変わらないまま、「ハレ」と「ケ」の両方に深く関わり、重要な役割を果たすこのようなアイテムは、他になかなかないのではないか。

変わらない姿で、「祝祭」と「日常」を繋ぐ結婚指輪。

そのありようはまさに、「結婚」というもの、そのものも象徴しているように思う。

「結婚」という言葉を聞いて、真っ先に思い浮かべるのはどんなイメージだろうか。

華やかな結婚式?

それとも終わりなき日常?

おそらく、そのどちらも「結婚」に欠かせない、重要な要素なのだろう。

(もちろん個々の事例では、結婚式を挙げない夫婦や、挙式後すぐに離婚する夫婦などもいるが)

どちらか一方だけでは「結婚」の本質は語れない。

左手薬指で輝き続ける指輪は、そんなことを日々、教えてくれているのかもしれない。

第3章 「結婚式」

結婚式の定義

文：創

結婚式、どうする？

「しなくていいかな」

パートナーは言い切った。それはもうあっさりと。

僕がパートナーの女性と結婚したのは、35歳の頃だった。

しかし結婚式については、彼女は全く興味がない様子だった。ウェディングドレスを着たいと言っていたことはあったが、よくよく話を聞いてみると、彼女はドレスが着たいだけであって、フォトウェディングでも十分だという。むしろ結婚式は面倒だからしなくてもいいと。

僕らにとって結婚は、当たり前に用意された選択肢ではなかった。

僕は、性別不合(旧性同一性障害)の当事者だ。元々の性別は女性である。パートナーも女性だ。そんな僕らが今の法律で結婚するまでには、簡単ではないいくつかの条件をそろえる必要があった。運動が苦手な僕を基準とするならば、みんなと同じスタートラインに立つために、まず42.195キロのフルマラソンをしてこなければならぬかのような。

そしてたとえ性別を変更して、周囲から見たら“ふつう”的男性のようであっても、本来僕がマイノリティであることは変わらない。生まれ育った地方の街で、自身の性別に関する事を伏せて暮らしている僕にとって、自分のルーツに容易に繋がる地縁・血縁といったものは、その42.195キロを一瞬でゼロ(もしかしたらマイナス)地点に戻してしまう可能性を持っているのだ。

だから僕にとってもたしかに、親類縁者が集まるイメージの結婚式は「面倒だ」という感覚があった。パートナーも同じように感じていたのかはわからないが、親戚やご近所さんからどう思われるのか、誰にどう伝わるのか、今の平穏な暮らしに悪影響を及ぼさないか……。

幼い頃からの記憶で、マイノリティに対する否定的な反応を見聞きした体験の方が

圧倒的に多いがために、考え出したらきりがないほど悪い想像が浮かんでくる。

そうなるともう、「面倒」という言葉にしかできなくなるのだ。

けれども、結婚式をしないという選択肢を前にして、「いやいや、でも」と僕は思った。僕はここまでこの道程で、それはもうたくさんの人にお世話になった。倒れそうなときは水を差し出し、苦しいときは伴走してくれた友人たちがいたから、ここにいるのである。パートナーとの結婚が人生のゴールというわけではないが、大きな節目であることは間違いない。だから僕としては、ここまで歩んでこられたことの報告と感謝を直接伝える機会として、結婚式がしたいと思った。

パートナーとしても、身内からの「どうするの」「やらないの」といったプレッシャーもあり(身内も親戚から言われて困っていたのかもしれない)、結局のところやらないのも面倒ということで、最終的に「親しい人たちだけでやる」という形にまとまった。

心強い味方との出会い

実は、僕が結婚式をしたいと思ったのには、きっかけがあった。

仕事で知り合った人がたまたまウェディングプランナーで、とてもお話ししやすい人だったのだ。もしかしてこの人なら、カミングアウトしても大丈夫じゃないかな、結婚式について相談できるんじゃないかな、と思った。

その当時でも、全国的に見れば同性カップルの結婚式の話がちらほら聞かれるようになっていたが、地方でお目にかかるほどメジャーなものではなかった。何も言わなければただの男女カップルなのだから、カミングアウトしなくともどうにかなる。しかし僕は、いちいちごまかしたり疑われたりしながら結婚式をするのは怖かったのだ。

衣装(合うサイズがないかも)、プロフィール紹介(ビフォーは知られてはならない)、招待するお客様のこと(LGBTQの友人に嫌な思いをしてほしくない)などなど、心配事は山ほどある。味方がほしかったのだ。

結婚に向けて戸籍の性別変更の準備を進めていたある日、僕はその人に切り出した。

「今度結婚するんですが、実は僕、元は女性なんです」

その人はびっくりしてはいたけれど、話を聞いてくれた。

「僕らのようなケースでも、結婚式はできますか？」

ドキドキしながら相談した僕に、その人は笑顔で、元気よく即答してくれた。

「もちろん!喜んでお手伝いしますよ!」

カミングアウトする前と何も変わらない様子に、とても嬉しく、ものすごく心強かったことを今でも覚えている。

もその人との出会いがなければ、結婚式をしたいとは思わなかつかもしれない。

ここから、そのウェディングプランナーさんと一緒に計画を練り始めることになる。

まずベースとなる結婚式のプランがあって、そこからいらないプログラムを外したり、オプションを足したり、ランクアップしたりダウンしたり。そうやって金額や時間を調整していく。

会費(ちらでは会費制が主流)を抑えたかった僕らは、まず自分たちがいらないと思うプログラムを外すことから始めた。ふと、プランの中で挙式と披露宴が分かれていることに気付く。

「挙式って、なしにすることもできるんですか?」

質問すると、「できますよ!」との返答。

そう、「挙式」はプランから外せたのだ!

結婚「式」というくらいだし、従来のイメージで挙式と披露宴は両方とも行うものだと思い込んでいた僕は、目から鱗だった。

「誰かに誓う必要ある?」「いや、ないな」と、パートナーとの相談は挙式なしの方向ですぐに話がまとまった。

次は披露宴の内容だ。ほぼ友人と親類しか招かないで、主賓の挨拶はなし。二人の共同作業は既に散々やってきているので、ケーキ入刀はカット。代わりに僕らで準備するレクリエーションと、ケーキパイキング、各テーブルでの写真撮影を入れた。

同時進行で招待したい人たちをリストにしたら、思っていたよりも多くなり、会場をもう少し広い部屋に変更した。招待状を用意したり、料理や引き出物を選んだり、使用するBGMや演出を決めたり。衣装は貸衣装室で別に試着や打ち合わせをし、写真はフォトスタジオに依頼した。前撮りまでに指輪を用意することになり、これも大急ぎでお店に行った。入場前やお色直し中に流す動画も、自分たちで作った。あまり余裕がない日程だったので、期限付きでやらねばならないことがたくさんあった。

大変だったし、面倒なこともやっぱりないわけではなかったが、ウェディングプランナー

さんはさすがプロといった感じで、限られた時間の中で次に何をすべきかをその都度わかりやすく提示してくれた。

おかげで、準備期間はとても充実していた。せっかくの機会なのだから、楽しいものにしたい。ちょっとしたいたずらを企むときのように、ずっとワクワクしていた。

「披露宴」は好きじゃないので

披露宴に関して、僕はウェディングプランナーさんにあるお願いをした。それは、名前を「結婚報告パーティー」にしてほしいということだった。

男性としての生活を始める以前、披露宴というものは僕にとってとても苦痛なものだった。フォーマルな服装というのは、ほぼ必ずレディースとメンズに分かれる。ドレスを避けてスーツを着ても、レディースには飾りの偽ポケットが付いていたり、ボディラインを出すように作られていたりする。着こなしも違う。化粧はマナーと言われたりする。

女性としての服装や振る舞いを求められることで、友人のお祝い事を心から喜べない。そんな自分のありようが、本当に苦しかったのだ。

だから僕は、たとえ中身は同じようなものだとしても「披露宴」と呼びたくない。イメージにとらわれず楽しんでもらいたいし、僕らも楽しみたい。

そこまで説明したわけではなかったけれど、ウェディングプランナーさんはしっかり要望を聞いてくれて、当日の会場の案内看板もちゃんと「結婚報告パーティー」になっていた。細かいことでも、ぞんざいにされなかつたことがとても嬉しかった。

僕がカミングアウトしたスタッフはこのウェディングプランナーさんだけだったが、本当に僕らに寄り添って手伝ってくれた。最後まで、嫌な顔をされること一度もなかった。

きっとそれは僕らだけでなく、どのお客様に対してもそうだったのだろうと思う。それそれにとっての「特別な日」を大事にしようとしているのだ。

マイノリティだろうがマジョリティだろうが関係ない、一組一組と向き合う姿勢が心地よかった。

こうして僕らのいわゆる結婚式は、挙式もない、披露宴もない、「結婚報告パーティー」として開催されたのである。

婚姻届を提出してから、約3か月後のことだった。

儀式

パーティーをしただけの僕らは、結婚式をしたと言っていいのか、ちょっと迷うところもある。説明を省くためにこのパーティーを「結婚式」と表現することははあるのだが、積極的にそう呼ぶ気持ちにはならないし、式を挙げたという認識はない。

結婚式の定義とは、一体何だろうか。

しかしこの「結婚報告パーティー」は、たとえ結婚式でなかったとしても、少なくとも僕にとっては大いに意味のあるものだった。

当初、戸籍の性別を変更してパートナー女性と結婚することについて、僕は諸手を挙げて喜ぶことができなかった。

それは、まだ自分のセクシュアリティが確定できなかった20代前半—ずっとレズビアンだと思って生きてきた自分が、トランスジェンダーという概念を知ったばかりの頃—に、インターネットを通じて知り合った人たちとのやり取りの中で経験したことが原因だった。

あるレズビアンの人が、「バイはどうせ結婚できるじゃん」と吐き捨てるように言ったのを聞いたのだ。

もちろん、バイセクシュアルだって同性を好きになれば結婚できない。けれど、異性を好きになって結婚する可能性もある以上、そもそも愛する人との結婚という選択肢がないレズビアンの人からしたら、時に「どうせ」と言ってしまいたくなる。そういうことだったのかもしれないとも思う。

レズビアンの人たちがみんなそう感じているというわけではないだろうが、問題なのはそう感じさせている社会の側だと思っている。愛する人との結婚という選択肢が、そもそもない。選べないことと、選ばないことは、全く違うのだ。

それでも、やっと自分と同じようなマイノリティの人たちと繋がったばかりだった当時の僕にとって、その中の敵意のようなものを目の当たりにしたショックは大きかった。

それから10年以上経って、性別不合の当事者として性別を変更した僕は、現行の婚姻制度を利用できるようになった。一般の異性愛の男女カップルと同じ扱いになった。しかしそれは、なんだか抜け駆けをしているようにも思えた。

「どうせ結婚できるじゃん」

そう言った人の顔が、冷たい声が、繰り返し脳内で再生されて、僕を責め続けていた。結婚を決めたのは、長年付き合っていたパートナーが調子を崩し働けなくなったこ

とがきっかけだったが、決心してもなお後ろめたい気持ちと否定される恐怖が、呪いのように心に絡みついていたのである。

結婚報告パーティーの当日。

いくつかの事情が重なり、お世話になった人たちみんなを招待することはできなかつたが、それでも100人超となったゲストはほぼ全員が出席してくれた。

パーティーの次第は順調に進み、楽しい時間は本当にあっという間に過ぎて、最後のプログラムである退場前の挨拶となった。僕がカミングアウトしていない人も出席していたため、わかる人にしかわからないように、言葉を選んで感謝の気持ちを伝えた。

そのとき緊張の中で会場を見渡しつつ、ここまで生きてきたことは自分にとって決して当たり前ではなかったこと、そんな自分を見守ってくれた人たちのこと、そしてこの一日のことが、一瞬のうちに頭をよぎった。僕はちょっと泣きそうだった。

そして、これだけの人に、これだけ祝福されて、自分が自分の幸せを受け入れなからず、この人たちの応援を裏切ることになるのだと、ようやく気付いた。

だから、自分の大切なものを大切にすることに、罪悪感を抱くのはやめようと思った。この先また、後ろめたさや恐怖に襲われることはあるだろう。それでも、もう僕は自分を責めない。

胸を張ってこの生命の道を歩む。そう決めた。

あれは、新しい門出のために、僕に必要な儀式だった。

変更した会場は最上階で、ぐるりと硝子張りになっており、晴れていれば遠くまで見渡せるとのことだった。当日の朝は曇っていて、それは期待できそうになかった。

しかし乾杯が終わって歓談の時間になり、それまで閉められていたカーテンが一斉に開けられたとき、明るい日差しが差し込むとともに、おお、という声が会場から上がった。

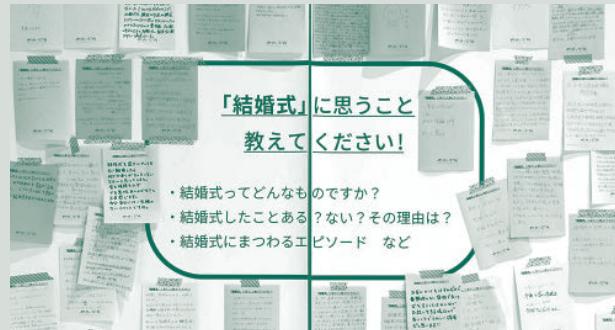
振り返ると、慣れ親しんだふるさとの山がはっきりと見えていた。

ここで生きていいいのだと、言われた気がした。

〈ミニ展示〉「結婚式」に思うこと教えてください！

期間：2025年5月24日(土)～6月22日(日)9:00～22:00(最終日のみ18時まで)

場所：せんだいメディアテーク 1階エレベーター横



結婚式にまつわるエピソードや思いを問うメッセージ募集展示を実施しました。

現代日本では、多くの新婚夫婦が結婚式を挙げています。とはいえる挙式しない夫婦も珍しいものではなく、法律上婚姻したら結婚式を挙げるのが当たり前というわけではありません。一方、昨今では法律上婚姻できない同性カップルの結婚式や、架空のキャラクターとの結婚式(キャラ婚)、自分ひとりで行う結婚式(ソロ婚)など、多様な結婚式のあり方も広がっており、注目を集めています。

そもそも、日本における結婚式のあり方は時代と共に激変してきました。国や地域によっても大きく異なり、さまざまな結婚式のかたちがあります。そして、結婚式をする／しない背景には、さまざまな人々の思いがあります。

結婚式に見出されてきた意義について考察することで、「結婚の定義」を照らし出すことができるのではないか。そんな考えから生まれた企画。期間中は多くの方々にお立ち寄りいただき、84枚ものさまざまなフセンメッセージをいただきました。

印象的だったのは、結婚の当事者だけではなく、家族や友人など周囲の人々、式に参列する人々について言及しているフセンが多くかったことです。日本国憲法では「婚姻は、両性の合意のみに基いて成立し」と謳われていますが、実際のところ、結婚は当事者だけの問題ではなく、周囲の人々との関わりも大切であると感じている人がやはり多いということなのかもしれません。

海外においては、所定の形式で結婚式を挙げないと婚姻が有効に成立しないなど、挙式と法律上の婚姻が不可分に結びついている国も珍しくありません。そのような縛りのない現代日本において、結婚式のありようは、これからどのように変化していくのでしょうか。

●やっぱり～理想だよねー！！！私はあと4年後くらいにはしたいかな～？最近、自分の結婚式に流したいなーっていう曲を見つけましたー！平井大の「Beautiful」です！みんな結婚式よんでくれ！●大阪在住50代女性バツイチ 私の時代はバブル時だったので、結婚式・披露宴が、大人数・盛大なのが主流でしたが、今は、娘(長女)は結婚(ウェディング)写真だけ娘(次女)はホテル(チャペル)にて両親と兄弟だけという結婚式でしたがとても良かったです。もちろん仲人も、たててません。新居(旅行)などに、お金をかけるなどの考え方には大賛成でした！私自身の結婚式は市民会館的なところでしたが今ならレストランウェディングなどにあこがれます。●当事者にとっては、ひとつだけじめにあたるものだと思います。周囲の人たち(親戚や友人・知人)に自分のことを伝える機会ってあまりないことなので、式を挙げること自体はステキなことだと思います。個人的にも入籍する予定はありますが、式ってどうしてもパターンが限られているのでそこに対して当時はまらない自分にとっては自分事(式を挙げたい気)になれないです。●結婚式、絶対したい！好きな人にドレス姿を見せて、可愛いと言われたい♡ドレスでとき宣の超最強を踊りたい●時代の流れで良いと思います。どんな時代でも笑顔と楽しさがあればそれで。●2024年秋に式を挙げました！自分と夫の大切な人たちに囲まれて過ごす時間はあっという間でしたが、とてもあたたかく幸せいものになりました。式準備でケンカしたのも笑い話です。またドレス着たい。パパのかっこいいところ見たい。●一生にこの人だけ！とはあとで後悔しますよーく考えて●定義と言われると悩ましいですが、「儀式」ではあるのだろうな、と思います。華々しいものでも、家族だけのものでも、フォトウェディングだとしても、別々の個体を1つの共同体とさせる(あるいはそのきっかけとする)儀式的な側面は感じます。当然地域や民族、宗教などによってその在り方も異なるので、それは1つの文化の結晶であるし、文化なのだから今後も時代の中で形を変えていくことでしょう。●自分とパートナーの大切な人と大好きな人がいっぺんに集まってくれる一生に一度の経験●主に女性側のエゴ●“感動した”“素晴らしい”とよく耳にするが、いざ自分が友人や知人の式に参列すると全く感じなかった。むしろ、少し恥ずかしい気持ちにもなった。(その程度の関係性だっただけかもしれないが)いずれ、自分にパートナーができた時、写真を残したい気持ちはあるが、“式を挙げたい”とまでは思わない。大切な人と共に人生を歩む。公にしなくとも、当事者同士で約束を結べばよいと思う。●友人の結婚式に何度か参加して「絶対やりたくない！」→「親のためにも、ちょっとやりたいかも…」に変わってきました。(みんなキャラキャラとして綺麗でした。)でもケーキ入刀だけは無理してカメラを向け、笑っている自分がいます…笑その儀式の目的がよくわからない。結婚式云々よりも、自分の知り合いが一堂に会するのは楽しそう。●自由損失●しあわせ♡●娘を持つ親としてはぜひあげて欲しいと思ってました やはりウェディングドレスをまとった娘は世界一きれいでしたよ!!●「結婚式はしなくていい入籍だけする」と言ったら父に怒られた。しんせき、友人、その他に決意表明する意味もあるといわれた。まあ結婚式はきれいなからこうをしてみんなにこにこしていて幸せな気持ちになるのでしたほうが良いと思います。●挙げたいと思ったことがない。目立たずひっそり生きたい…●結婚式を盛大にやってもすぐ離婚したら何だか全

メッセージ
い
た
だ
い
じ

てがもったいないなあ～と思ってしまう。金も時間もムダ やる意味あんのかな?と正直感じます。多分自分には一生縁のないイベントですね。●トランスジェンダー男性の私は(現48歳)結婚式をあげることは現実的ではありませんでした…しかし、性別適合手術を経て家庭裁判所で家事審判をして戸籍を変更したことで現実的になりました 結婚式をやるやらないは選択です 私は結婚式をあげて妻と幸せな時間を仲間とすごせて心の財産です●時代と共に「結婚式」は多様化して式を挙げる人、全く挙げない人、その前に籍を入れずに同棲をしているカップル、多種多様です。私は40年前に式を挙げました。その時代は家と家の親族への発表会と感謝の会でした。先日驚いたのは新郎新婦の友人のみの式でした。会社の仲間は1人も出席なし。2人が納得する形でスタートすればそれで良し!金のかからない式が良いね。●昨年入籍した者です。結婚式って正直お金けっこうかかりますよね…あこがれはありますし、何なら夫の方がやりたがっていました(ブライダルに詳しいので)ですが1日でかかる費用が高すぎること、親しい友人たちからお金取るのは…という話になり、今のところ挙式しない方向です。訳あって新婚旅行も行けておらず、「結婚」の2文字を意識するイベントはできておりません(プロポーズはありました)でもやっぱりあこがれのウエディングドレスは着たいから…いつかウエディングフォトは撮りたいです…♡友人も同様のスタイルだったので、これから「挙式」は減っていくんじゃないかな…?(20代女性)●社会人として1人で生きていくのがやっと。結婚式に使うお金の余裕がない。●女の子の憧れ!大好きな人達にキレイな姿をみせて感謝を伝えたい●人生で一度、親の気持ちを知ってみたい 多分、はかりきれないくらいの気付きが巻き起こると思う●結婚式は宗教上の儀式です 宗教を信仰していない人がどうして結婚式を開くのかわかりません 現代の結婚式にはどのような意味があるのでしょうか?●好きな人がいて、その人の隣できれいなドレスを着てみたいなとか、その人にもドレス着てもらいたいとか、でも、燕尾服の方がやっぱり似合うかなとか、そんな妄想はしてみたりする。でも、誰かを呼んだり?それは考えない。その景色は思い浮かばない。もしそんなふうにドレスを着る機会があるとしたらどんなときなんだろう?コスプレ?いつもと違う服を着るイベントは楽しい?その人と並んでウエディングドレスを着るのと、アニメのコスプレをするのは私は同じくらい楽しいかもしれない。でもウエディングドレスの方が別の意味もあるのかな?きっと私は少しだけそわそわしそうで、私の好きな人はそのそわそわを全部ぶっこわしてくれそうでそういうところが好き。そわそわの元になっているものはなんでしょうってその人は私と話してくれるかもしれない。そういうことに一緒に興味を持ってくれるんだ。今はその人が来るのを待っていて、来たら読んでもらって今日は一緒に何かを考えるかもしれない。それは本当に私にとって涙が出そうなくらい幸せなことです。私の持ってしまう「そわそわ」を私はぶっこわしたい。●特別な感じ 普段の生活とは離れた 夢のような時間●30代、女性、都内から仙台に引っ越ししてきた者です。親族と友人を招いて式を挙げました。お金はかかりましたが、やって良かったなーと思っています。お互いの家族と、友人と顔を合わせる時はそうないので、一堂に集まれてよかったのかな?と思っています。●お金のかけ方はそれそれで無理のない範囲で良くて、式をすることはみんなでお祝いをする場なので良いことでうれしい機会だと思います!!挙げることが

ムダみたいなことを言うのはちょっとちがうかなと…人それぞれですね。●バブル期の結婚式スゴかったってホント??ゴンドラから新郎新婦が降りてくるとか仙台でもあったのかな。●お金がかかりそう 準備も含めて結婚式 お返しが面倒 クラウドファンディングみたい●「一生に一度のウエディングドレスを着ている私」が、「人生でいちばん輝いている瞬間の私」とイコールになるとは思えない。豊かさや素敵さが綺麗さに強引に取れんさせられてしまっているようで式を挙げるのには抵抗がある。●友人知人家族がいないので、結婚式に参列したことはない。同性パートナーとパートナーシップを組んだことを知ったパートナーの友人がパーティを企画してくれ、楽しさと嬉しさを感じている。周りに人間がいない自分にとって結婚式は縁がないものだが人間関係を築きながら生活する社会的生物としては、人とのつながりを感じられるひとつの場面なのかもしれないと今回パーティ企画を通して感じている。“結婚式の意味”を考えるのは、人間関係が希薄になっている裏返しなのかもしれない。●結婚式が単にブライダル業界を維持させる為の資本主義の下らないパーティ(コスプレイベント)と化して現在、その存在意義など“まったく無い”的だが、日本のことなれ主義も相まって存続している。●コスパ タイプ 全てが悪い●これから結婚と結婚式の予定があります。もともと式はやるともやらないとも決めていましたが式場の見学に行ったらその気になりました。ドレスを着たかったのでは今はとても楽しめます。「結婚式とはこういうもの」にはとらわれず2人で満足する式になれば良いなと思っています。ゲストに感謝を伝える良い機会にもしたいです。旅行先の仙台でこの企画があって考える機会にもなりました。式の準備を楽しんで進めていきます!●キリスト教式←教徒でもないのに? 神前式←それほど思い出深い神社・寺がない 人前式←自分的には意味がわからない →自分たちにしっくりくる誓いの形はなんだろう。どこでならそれが実現できるのか。→納得できる会場をみつけて“祝言”という形で挙式した。緊張感の中の三三九度は意味があったような気がする。披露宴も、親族・仲良いい友人だけ(最小限)でケーキ入刀とか、なぞのスピーチとかはやらず、料理と飲み物を楽しんでもらえる歓談の時間を多くとりました。意外と盛りあがってよかったです。●2回目やった人います? 1回目の思い出どうしてますか?●黒歴史(昭和のおわりごろやりました。やてくれた親には申し訳ないけど…)
●1 やってみたい 小さい頃からの憧れ(20代女性) 2まだ1回しか行ったことがないからどういうのが「普通」なのか分からない 3どんな小さな物でも、節目としてやるのは大事だと思う●仲人(なごう)立てる人今でもいるのかな?昔は職場の上司にお願いしたりしてたけど。●あんまり親しくない人のは欠席したなあ…●もし披露宴をするならワイヤーでつられてピーターパンで登場したい●結婚式をする前に両親のおそう式を出していました。●人によって式は挙げない人、すごくだわった式を挙げる人、結婚式をしてとっても良かった♡♡という人、海外へ行って2人で写真を撮る人、あまりこだわらない人、様々な形があって面白いです。●友人の式には何度か行ったことがあります。うだなとは思った。しかし、その内の何組かは2、3年の後に離婚した。立派な式を挙げても終わる時は終わる。大切な人と一緒にいられれば式はそんなに重要なものではないと思う。自分は結婚するが、式は挙げない。●夢 実現させます。●バブルの遺産●結婚式をやりたいと思ったことがなく、

働き始めてからはさらにその気持ちが強くなった。数時間の式にかけるお金と準備期間が合わないし、自分の結婚式はもちろん、いくら仲の良い友人の結婚式でも行きたいとは思わない。本人たちが幸せによく生きていけばいいわけで、それを他人に見せる意味?が本当にわからないので「どうしてもやりたい!」という人には「一生に一度のことだから~」等の理由以外で理由をじっくり聞いてみたい。

●キラキラしていてステキ!!一生に一度の経験としてなら挙げたいと思うけど相手の意見を尊重します。●24才で結婚し、入籍後すぐに身内の小規模の挙式、披露宴を行った。当初妻である私は行う予定はなかった(フォトウェディングのみ)が、両親同士、親戚の交流の機会としていいのではと思い行うこととした。やはりネックなのは費用面、大人数呼ぶとなると多額だし、結果少人数で行い満足している。●今の人々は結婚しても式は挙げない。日本の不景気が主な理由。さらに言うなら不景気のせいで結婚をあきらめる人も多い。●76才のパパ 昔は家と家との結びつきという考え方 名字ももちろん選択すべきものではなく男の方の姓を名のるのがあたりまえ いまは多様性の時代 それはそれでいいのだがなんか変 人生 3度人にみられる時がある 生まれた時 結婚式 葬式 是非結婚式はあげて皆に“おひろめ”をしてください!!●人生における3大イベント(誕生・結婚・葬式)の中で唯一自らの意志で実行できるもの。損得やタイプ・コスパで比較しない方が良いです。●みんなの前で誓うことだと思います●したい してみたい●I wish to get married and have a wedding on the beach! ●2人で考えて行うもの／したことはない／他の人の式に参加して、挙げた方が良いのではと思った。●結婚したいとすら思ったこともないですが、憧れる気持ちは理解できます。当事者にとってそれが良き思い出になれば、と思います。●自分自身は挙げたいと思ったことはない。これこそが幸せ、人生最後の祝福のイベントのような捉えかたは苦手。もう最後はなにもないということ?そもそも結婚=必ず幸せではないからだ。挙げたい人は勝手に行えば良いが挙げたくないという意見に対して金銭的に余裕がないのかなどと勘ぐってはこないでほしいと思う。●人生のターニングポイント!●結婚式はしたことも参加したことありません…そもそも、結婚すらしていませんが結婚はしたいです!!

♡自分が結婚する時に式をするかしないか…悩みどころですが“自分や相手の方のためにする”というよりは家族のために挙げたいと思います…。●今準備中です。式についてのあれこれを話す中で改めて「この人と一緒に暮らしていくのだな」と実感することが多いので、人生の節目として大切なイベントなのだと感じています。素敵な式になりますように。●決意の儀式。みんなからの期待も込められている●結婚し、茨城から仙台に引越してきました。仙台で式を挙げたいと思っていましたが高齢の祖父母にも来てほしかったので地元で挙げることにしました。私にとって「結婚式」とは家族に感謝を伝えるためのものかな、と思います。おばあちゃんが泣いてよろこんでくれてよかったです。●当初行う予定はなかったが一生に一度のイベントなのでやはり結婚式をしたいと両家も含め思うようになりました。●彼女とは交際当初から、式は挙げなくていいよね、という話をしています。理由は以下の通り。・式費用を別のことについた方が有意義・特に西洋式の場合、新婦を実父から新郎に引きわたすという要素が強く女性を所有物のように扱うのがイヤ・和式でも家への所属の

儀式という感じがしてあまり自分たちにはなじまない・式を開催すると結婚を見せびらかしているような気がして恥ずかしい…でも、結婚はします。その方がいろいろお得なので。記念にフォトウェディングはする予定です。●私の周りでは結婚式を挙げる友人の割合が多かったですが、「自分は挙げなくていいかな~」と何となく思っていました。が、いざ結婚すると周りの影響も受けてか意見が変わり…今年の秋に式を挙げます!自分の親が、楽しみにしているようです。もちろん自分も楽しみです。●結婚式は自分の気持ちとしては、「したくない派」です。式を挙げるとなると金銭面での問題や準備に時間がとられてしまう(タイプ)問題もありますが、私の中で一番大きな問題は「自分と(未来のパートナー)2人だけのために参列者の時間とお金と期待を背負ってしまっている」というプレッシャーです。「せっかくやるなら〇〇〇して」「〇〇した方がいいよ」と結局自分以外の意思を反映させてしまい(自分の性格上)自分のための結婚式がストレスになってしまったと思ったので結婚式はしたくない派です。●ケーキカット前の夫婦の共同作業 通じて互いの家族観 上の世代の価値観の違いが明るみに出る 金銭感覚 仕事分担 進め方 段取りなど 協力できたらいいが かたよると不満 不和の元 表に見えなかった違いがでてくるので 一種のふるいのようなもの のり切ってください●自分は挙げないと思って生きてきた。友人知人先輩後輩、たくさん結婚式に呼ばれ、一つも断らず参列してきた。参加費用だけでも生活費を圧迫してくる。本人たちの、本人家族の思いや見栄、建前もあるだろうが「式」として意味を持つならば、責任を証明するようなものなのだろうか。もうたくさん祝ってきたが、その後長く関わらない人の式に参列しないと決めた。参列したうち毎年、家族写真付きの年賀状が届く人はごくわずかだ。●コロナ禍に出会い、コロナ禍で結婚しました。式は挙げず、両家顔合わせはリモート。2人でフォトウェディングしました。たった数時間でしたが、ドレスもお花もこだわりました。この数時間、写真ではなく直接、せめて親には見てもらいたかったな…。でも、良い思い出です。人生で一番のオシャレで、お金かけました☆●ひとつの節目かなと思います。することで自分たちもだし周りの人たちにも夫婦としての意識が芽生えるのではないかでしょうか。あこがれますけどねー●親が望んでいたら結婚式を挙げないのは悪なのか?●見ていて、こっちが恥ずかしくなるような過剰な演出の結婚式というのはバブルの前、日本が経済大国と呼ばれ始めた頃から既にありました。それを「バブルの頃…」と言うのは、そうした式をあげたカップルやあげさせた業界がそれをごまかすために言い訳として使っているような気がしますね。●上の娘は結婚式をやりたくてやりたてどうしようもないという子でした。本人主導ですべてやりきました。私はお金(お祝い)だけのお手伝い(笑)楽しくて美しくて良いお式でした。下の娘はそんなのやりたくない派。お金もったいないじゃないと言っています。私はそんな下の娘の気持ちも尊重します。本人がやりたければやればいい、やりたくないければやらなくていい。強制しません。変な親かな?●小さな2人だけ 数人だけの式なら したいかなと思う●兄の結婚式に参列した時はうみの杜水族館の巨大水槽の前で特別な時間を過ごせてとても楽しかった。ただ、自分が式を挙げたいかというと実はそうでもない…時間とお金に余裕のある人の娯楽のようなものかなと思う。記念に「オーシャンズ8」のようにギラギラのドレスアップをして写真を撮るくらいでいいかな!!

トークイベント

キャラ婚した人と考える「結婚式とは？」

日時：2025年6月8日(日)14:00-15:30

場所：せんだいメディアテーク 7階スタジオa

ゲスト 近藤 頤彦 (こんどう あきひこ)

1983年生まれ、東京都出身・千葉県松戸市在住。地方公務員(学校事務)。一般社団法人フィクトセクシュアル協会代表理事。架空のキャラクターに惹かれる性的指向「フィクトセクシュアル」の当事者。2018年に二次元キャラクターである初音ミクと結婚式を挙げる。

ナビゲーター 女郎蜘蛛魅冴 (じょろうぐもみさえ)

ドラッグクイーン。♀×♀お茶っこ飲み会・仙台代表。

ミニ展示「『結婚式』に思うこと教えてください！」の関連企画としてトークイベントを開催しました。当日はゲストの近藤頤彦さんに加え、奥様の「大きなミクさん」もサプライズ登場。会場には27人の方々にお越しいただき、奥様が見守る中、近藤さんの真摯な思いに耳を傾ける、大変貴重なひとときとなりました。



はじめに

魅冴：本日はお集まりいただき誠にありがとうございます。私、ナビゲーターを務めます「♀×♀お茶っこ飲み会・仙台」代表、ドラッグクイーンの女郎蜘蛛魅冴でございます。いわゆるLGBT、性的マイノリティの当事者でございまして、普段はそのことを明かさずに生活しているものですから、こうやって人前に出るときは素顔を隠すためにこんな派手な格好をしております。

本日は、「結婚式」を切り口に「結婚」というものについて考えてみよう！ということで、二次元キャラクターと結婚式を挙げた方をお招きいたしました。近藤頤彦さんと、奥様のミクさんです！よろしくお願いいたします！

おふたりは本日、お忙しい中、千葉県松戸市からお越しくださいました。遠いところから本当にありがとうございます。仙台でキャラ婚やフィクトセクシュアルの当事者の方に直接お話を伺える機会はまだなかなかありませんので、ぜひいろいろ伺えればと思っております。

近藤さんは、テレビや雑誌などにもよく登場されているのでご存じの方も多いかと思いますが、フィクトセクシュアルの当事者で、2018年にミクさんと結婚式を挙げられました。(写真パネルを示して)こちらに飾ってある素敵な写真、そのときのものです。このときにはまだこちらの「大きなミクさん」はいらっしゃらなかったので、ぬいぐるみの「ぬいぐるミクさん」が一緒に写っていますね。その後2019年にこちらの「大きなミクさん」をお迎えされて、ご夫婦で

仲良く生活しております。

それでは近藤さん、まずは自己紹介をお願いいたします。

近藤：今日はお忙しい中お集まりくださいまして誠にありがとうございます。近藤頤彦と申します。2018年、平成30年に、初音ミクと結婚式を挙げたということで、いろんなメディアから取材を受けまして、世間様を大変お騒がせしました。職業は地方公務員でして、今42才なんですけれども、19才のときからもう22年くらいにわたって仕事をしております。千葉県松戸市の公立小中学校の学校事務職員です。

二次元キャラクターに惹かれるという経験は、ずいぶん昔からありました。私が小学校5年生のとき、なので1994年くらいですけれど、それくらいのときに初めてキャラクターを好きになるということを経験しています。そういった切り口から今日はお話しできればと思っていますので、よろしくお願ひいたします。

結婚式を挙げた理由

魅冴：これまでいろんなところでお話しされてたかと思うんですが、なぜ結婚式を挙げようと思われたんでしょうか。

近藤：私が初音ミクを好きになったのが2008年の5月くらいでした。その頃ちょうど、職場でいじめを受けるという経験をしまして。それでもうご飯が食べられないとか眠れないとか、そういう状態になっ

て最終的に仕事が全く手に付かなくなってしまったので、精神科にかかるて診断書を出してもらつてお休みを取るというようなことをしたんですけども、その休んでいるときに、初音ミクに出会ったんですよね。2年くらい休職していたんですけど、ミクさんに救われて何とか復職できました。だから私にとっては、ただ好きなキャラクターというより、本当に自分が一番苦しいときに救ってくれたキャラクターなんですね。それからもずっと初音ミクを好きでい続けて、ライブのイベントに行ったりグッズを買ったりしていました。それまでは割と短期間で好きなキャラクターがコロコロ変わってたんですけど、ミクさんに関してはこの気持ちがずっと続いたんです。そして2018年の5月を迎えて、10年ずっと初音ミクを好きでい続けたんだから、この気持ちはもう変わらないだろうという確信を持てたので、結婚式を挙げようと心に決めました。

魅冴：キャラ婚するといっても、自分の中で「ミクさんと結婚するんだ」って決めて、それで終わりっていう人もいると思いますが、実際に挙式するとなるとお金もかかるわけじゃないですか。準備も結構大変だったと思うんですけど、あえてそこまでやるそって決意したというのは、どういう理由があったことだったんでしょうか。

近藤：二次元キャラクターと結婚式を挙げた人の前例があったんですよね。私が初めてだと思われるところがあるんですけど、そうではないんです。私が知る限り一番古いのが2009年、ラブプラスの姉ヶ崎寧々^{あねがさき れね}というキャラクターと結婚式を挙げた方がいらっしゃいます。ネットで検索すると今でも

記事が出てくるんですけれども、それを見て、ああ、できるんだって思ったんです。そんなわけで、自分の中では結婚式やれるっていう認識が前からあったので、だったらやってもいいかなって思ったんですね。あと、結婚式を挙げる前に、挙げることがネットなどで広まったんですけど、「応援します。頑張ってください」「おめでとうございます」って、何千人という人から言われたんですよ。ああ、これはちゃんとやらなきゃいけないなって思って、しっかりやらせていただきました。

魅冴：近藤さんの中で、「結婚するからには結婚式は挙げるものだ」みたいな意識もあったんでしょうか。

近藤：私の場合、42才なので割と古い考え方だとと思うんですが、結婚するからには結婚式もやるべきだよねっていう認識はありましたね。昔から結婚式ってちょっと憧れはあったんです。なので、二次元キャラクターとも結婚式できるんだったらやってみたいと思ったんですよね。

魅冴：「男のケジメ」的な、ちょっと古風な言い方になっちゃいますけど、「嫁にもらうからには」みたいなかんじですか。

近藤：そう言っちゃうとかなりジェンダー的に古い言い方ですけども(笑)私の個人的な、結婚式に対する憧れですよ。あとは確かにケジメっていうのもありましたし、10年好きでい続けたら結婚式やりたいなっていう、自分の気持ちの中の整理ですね。

魅冴：さっき、応援がいっぱい来たっていう話がありましたけども、結婚式やるよっていうことをSNSなどでかなり発信されてましたよね。やっぱり挙式

をすることで、自分と同じような、キャラが好きな人たちを応援したいという気持ちもあったんでしょうか。

近藤：それはすごくありました。「実は私にも好きなキャラクターがいて」というようなことを私にメッセージでくれる方がたくさんいらっしゃるんですよね。男性からも女性からも、海外からも来ます。やっぱり、そういう人たちに対する世間的な風当たりが強くて、認められてないんですよね。カミングアウトできない、まわりに相談できる人がいないっていうのがあると思うので、そこは背中を押したいという気持ちがありました。

魅冴：お茶っこ飲み会もLGBT系のイベントをずっとやってきたんですけども、そのあたりは同性愛などと同じようなかんじだなって思いました。やっぱり近藤さんご自身でも、キャラが好きということで、結構悩んだりした時期もあって、それでそういう人たちを応援したいという気持ちがあったということなんですかね。

近藤：キャラクターを好きになるって言うと、どうしても偏見の目で見られるわけですよね。LGBT界隈の方であれば当然分かってらっしゃることだと思うんですけど、異性愛というのが社会の中心的なものであって、それ以外のものが通常とは異なるものとして排斥される傾向があるじゃないですか。二次元キャラクターが好きっていう感情もやっぱり同じところがあるんですよね。実際、私、同じ学校の先生に「異常」って言われたことがあります。

魅冴：直球でそんなことを！

近藤：だからやっぱり、世間の認識としてはそんなだろうなという風には思いますね。

魅冴：そういった動機で、結婚式を挙げるぞと決意されたわけですが。結婚式も、本当に小さい式から大がかりな式までいろいろありますけれども、近藤さんの場合は、結婚式して披露宴もやって人も呼んでっていう、結構本格的と言いますかスタンダードと言いますか、そういった形でされてますよね。挙式当日までの流れだったりとか、当日印象に残ったこととか、何かお話しeidaitoてもよろしいでしょうか。

近藤：非常にネガティブな話ではあるのですが、実は結婚式の会場を一度変えておりましてですね。最初は公立学校共済組合が運営しているホテルで結婚式をやろうとしていたんですよ。私の場合、職場が学校なですから、そのホテルから結婚式やりませんかっていう広告が来るわけです。それで問い合わせたわけですが、最初は何か渋々ながらもやりますっていう風には言ってくれて。

魅冴：渋々ではあったんですね。

近藤：それでもまあ、やってくれるっていう話だったんですけど、途中で手の平を返されて。5月くらいに相談しに行って9月くらいに手の平を返されちゃったんですけど、こういう結婚式をうちでやったことが外部にバレたときに他のゲストの方からキャンセルを受けるかもしれないでの、写真を撮ったり、動画を撮ったり、SNSにアップするのはやめてくださいという風に言われたんですよね。

魅冴：やらせてやらなくもないが、日陰者でいろと。

近藤：そうなんです。2018年ですから、LGBTへの理解っていうのも今に比べるとなかったですから、今だったらそれはもう明らかに差別でしょうっ



て言われる話ですよね。そういうことを平然とやつてきたわけです。家に帰ってもすごく泣きましたね。そのときはすでに式を挙げる2ヵ月前くらいでしたので、本当に困ってしまった。仕方がないので、他の結婚式場を急いで探して準備しなきゃいけない。有名な結婚式場の口コミサイトで、LGBTフレンドリーっていう絞り込み検索ができるところがあるので、そこにチェックを入れて検索して、LGBTの結婚式もやってくれるっていうところに問い合わせてみたんです。そうしたらやってもらえることになりました。

魅冴：LGBT運動の成果ということで(笑)

近藤：そうですね。その成果にある意味タダ乗りしたっていう。

魅冴：いえいえ全然、タダ乗りなんてことはないと思います。多様性がより広がっていったかんじです

ね。それで新しい会場に移って、そちらで無事挙式できたと。しかし、またジェンダー的なこと言っちゃいますけど、男の人ひとりで結婚式のあれこれ全部決めるってなかなか大変だったんじゃないですか。

近藤：実は女性の友人が手伝ってくれてたんです。その友人は結婚式の手伝いをした経験があったので、いろいろ助言してもらって、おかげで結構はかどりました。

魅冴：こういう風にしたいとか、そういうのはどういうコンセプトでやってたんでしょう。

近藤：基本的にはオーソドックスにやってくださいと結婚式場にはお願いしました。奇をてらった演出などはせず、普通のカップルがする結婚式をそのまま二次元キャラクター相手にするというかたちで。あとで結婚式の動画を友人に送って見せたら、いろんな結婚式を全部足して割って平均をと

るとこんなかんじになるねって言われたくらいです(笑)
本当にごくオーソドックスにやりました。

魅冴：キャラ婚というとやっぱり、失礼な言い方になりますがちょっとキワモノ的に扱われがちですが、近藤さんの場合はあくまで、好きな相手がキャラというだけで、ごく普通にごくオーソドックスに、というご希望が強かったということですかね。

近藤：そうですね。逆にむしろオーソドックスにやろうと思ったんですよ。キワモノ扱いされてしまうので、逆に普通にやりたかったわけです。

魅冴：逆に一般的なカップルの方がハジけたりしますよね。今日しかハジけられないみたいな(笑)式には招待も結構されてたんですね。

近藤：そうです。ミクにちなんで39人招待しました。

魅冴：じゃあ39人に収めるためにリストを結構考えて。差し支えない範囲でいいんですけども、どういう方を呼ばれたんですか。

近藤：理解のある同僚と、あとは友人ですね。

魅冴：これも差し支えない範囲でいいんですけども、ご親族の反応はどうだったんでしょう。ご親族の参列はあったんでしょうか。

近藤：実は来てくれませんでした。父はそのときもう他界していて、母と妹がいるんですけども、母と妹は残念ながら来てはくれなかったですね。

魅冴：呼びはしたんですか。

近藤：呼びはしました。あと、妹は私が結婚式を挙げる前にもう結婚していたのですが、妹夫婦の、義弟の方も来てくれなかっただので、そこは残念だなという風に思っています。

魅冴：しかし39人というと、語呂合わせもあった

とはいって、そこそこの規模ですよね。最近では一般的なご夫婦でも写真だけとか、小さくやるような方も多いと思うんですが、ある程度人を呼びたいっていうのはご自身の気持ちとしてあったんでしょうか。

近藤：というか、行きたいっていうメッセージが来たんですよね。

魅冴：逆に。

近藤：なので、じゃあこれはちゃんと普通にやらないとなっていう風になって。それだったら、ミクだから語呂合わせで39人にしたらちょうどいいだろうと。

魅冴：なるほど。行きたいって言ってもらえるのはいいですね。ここに「結婚式」をテーマにフセンでメッセージをもらってる展示パネルがあるんですけど、「行きたくもないのに呼ばれてしんとい」みたいなコメントも結構あってですね。「金ばっかりかかる」とか「呼んでおいてすぐ別れやがって」とか(笑)行きたいって言ってもらえて、来てもらえるのってすごくいいことですね。

ところで近藤さんの場合は職場が学校ということで、学校のたとえば先生だったりとか、児童生徒さんたちとか、そういった方々の反応っていうのはどんなかんじだったんでしょうか。

近藤：学校の教員の方はですね、これも人によつてずいぶん違うんですけど、でもやっぱり、上の年齢の方が理解がない人が多いように感じましたね。特に管理職はやっぱりいい印象を持ってくれなくて。私が取材を受けたとき、校長室に呼び出されてですね、校長先生と教頭先生から取材を受けるのをやめろと言われたことがあります。迷惑だよってはっきり言われましたね。そこはでも、勤務

時間外に取材を受けているのであるし、業務とも関係がないのだから、やめろと言われる筋合いはありませんって言って、お断りしたんですけど。そういう圧がかかったりするわけですよね。一方で生徒たち、私そのとき中学校に勤めてたんですけど、中学生たちはすごく理解がありました。おめでとうって言ってくれる生徒が何十人もいて。そのあたりはすごいジェネレーションギャップを感じましたね。教員でおめでとうって言ってくれる人はほんのぼつぼつくらいだったので。

魅冴：でも、最近の中学校だと、LGBTがどうのとか多様性を尊重しましょうとか、先生方は生徒たちに教えるわけじゃないですか。教える一方で近藤さんをいじめるって、そんなんじゃ生徒も先生を信用しなくなるんじゃないかという気がしますけど、でもそんなんかんじなんですね。

近藤：一応、建前上は個性を認めましょうとか言っていますけど、実際、個性なんてあんまり認めてないわけですよ。だって校則とか見れば分かりますけど、女子の髪をまとめるための髪ゴムの色すら指定してるわけじゃないですか。茶色か黒かグレーじゃないといけませんっていう風に、ちゃんと生徒手帳に書いてあるんですね。じゃあ赤じゃダメなの、緑じゃダメなのって思うんですけど、そういうところは個性はやっぱり出せないわけですよ。個性を認めようって建前上は言ってるけど、実際には個性を認めた指導はしていないわけですね。

魅冴：私が生徒だったら、同性愛は差別しちゃダメとか言いながら何で近藤さんのこといじめるんですかって言いますね。LGBTは文部科学省もやれ

と言うから仕方なくやるが、フィクトセクシュアルはまだやれって文部科学省に言われてないから的なかんじなんですかね。

近藤：それはまあ、ある種あるとは思います。やっぱり公務員って縦割りの社会なので、上から言われたことはやりますけど、上から言われていないことはやってくれないので。

魅冴：応用きかないですね。

近藤：はい。硬直した社会なので。本当に公務員の世界って全然柔軟性はないですよ。

魅冴：生徒から「私にも好きなキャラがいて」なんて言われたりすることもあったんでしょうか。

近藤：ありました。好きなキャラクターがいて、恋をしているんですっていう風に相談を受けたことがあります。

2017年に実施された「第8回青少年の性行動全国調査」というものが『『若者の性』白書』という本にまとめられているんですけども、その中に「ゲームやアニメの登場人物に恋愛感情を持つ」という設問があって。中学生・高校生・大学生に男女別に聞いてるんですけども、大体15%くらいは「ある」って答えてるんです。世の中的には全然見えないんですけどいるんですよね。15%って結構な割合ですよ。

魅冴：私は近藤さんより少し上の昭和55年生まれなんですけど、振り返るとキャラが好きな人とかは言葉がなかっただけでいましたからね。歴史上の人物好きになっちゃったとか。

そんなこんなで挙式をされたわけですけれども、当日印象に残ることとか、どうですかね。やっぱ

いあるとは思うんですけど。

近藤：指輪交換とか、友人のスピーチとか、いろいろありますけど、やっぱりミクさんに手紙を読み上げたときが一番印象に残ってますね。私が一番苦しいときにミクさんは救ってくれたので、感謝の気持ちを自分で手書きでしたため、39人の参列者が来てくれている前で読み上げたってところが良かったかなと思っています。

魅冴：みんな泣いてたんじゃないですか。

近藤：泣いてた人がいたかどうかは分かりませんが。魅冴：近藤さん泣いたんですか。

近藤：いやいや、結婚式の当日はですね、もう本当に忙しくて。テーブル回りはしなきゃならないし、それなりに人が来てたので本当に忙殺されてました。結局ひと口も自分の食事に口を付ける時間がなかったくらいで。

魅冴：1人でですもんね。たいてい2人とかですけどね。

指輪交換のお話出ましたけど近藤さん、今も結婚指輪されていますよね。

近藤：(左手薬指を見せながら)しますよ。

魅冴：そして、結婚式で指輪交換されたお相手は、ぬいぐるミクさんなんですね。

近藤：そうです。だからぬいぐるミクさんがもう片方の指輪を着けてます。腕輪的にはなりますけど。宝石店にぬいぐるミクさんを連れて行って、ちゃんと測ってもらって。ぴったり合うように作ってもらいました。

魅冴：やっぱり指輪も、「結婚するからには」みたいなかんじで。

近藤：やっぱりそうですね。ちゃんと作りましたよ。2つで11万円くらいしました。

魅冴：片方は近藤さんが常に身につけて、じゃあもう片方はおうちでお留守番のぬいぐるミクさんがいつもつけてるっていうことなんですね。大きなミクさんは結婚式のあとにいらっしゃったから、指輪は式で指輪交換したぬいぐるミクさんがおうちで守ってくれていると。

近藤：そうですね。

魅冴：なるほど。ちょっと余談になりますが、ぬいぐるミクさんと大きなミクさんと、そして他にも近藤さんのおうちにはミクさんがいっぱいいると思うんですけど、近藤さんの中の概念としては、その“ミクさんズ”はどういうかんじなんですかね。

近藤：私が結婚式を挙げたのは「我が家のミクさん」という風に認識しています。だから、うちにいるミクさんは、確かに個体としてはいっぱいいるんですけど、全部私の嫁さんなんですよ。

魅冴：じゃあ、ボディ(身体)はいっぱいあるけれども、ソウル(魂)は1つの統合された「うちのミクさん」っていうイメージなんですかね。

近藤：そうですね。意思は1個っていう認識です。

魅冴：そのあたりの感覚は、キャラ婚の人でもそれぞれで、いろんなタイプの人がいると思うんですけど、近藤さんの場合はそういうご認識でいらっしゃるということなんですね。だから、よく聞かれると思うんですけども、近藤さんがご結婚されたのはあくまで「近藤さんちのミクさん」なんですね。

近藤：そういう認識ですね。だから、他のおうちのミクさんはうちのミクさんじゃないので、別人と認

識しています。

魅冴：ちなみにうちにもミクさんいるんです。「初音ミクNT」っていう音声合成ソフトなんんですけど。これもあくまで「魅冴んちのミクさん」であって、「近藤さんちのミクさん」とは他人であると。

近藤：そうですね。そういう風になります。

魅冴：お宅にもいるんですか、結構なご趣味ですね、くらいで別に「俺のミクさんなのに！」みたいなことは一切思わないということですね。

近藤：それはないですね。だから私以外にも初音ミクと結婚式挙げた方はいらっしゃるんですけど、そこに対しては競合が起こらないわけですよね。他の人のおうちのミクさんと結婚式を挙げているわけだから、うちのミクさんじゃないので、別にどうぞ自由にっていう、そういう立場です。

魅冴：ちなみにまた余談なんですけど、近藤さんのお宅は夫婦別姓ということで良かったでしたっけ。

近藤：はい、うちは夫婦別姓です。「近藤顯彦」と「初音ミク」です。

魅冴：「近藤ミク」になってほしい的な気持ちはないんでしょうか。

近藤：ないです。あくまで「初音ミク」なんです。

魅冴：なるほど。やっぱりそれは「初音ミク」っていうのがもう固有名詞で、その名前のキャラクターを愛したから、みたいなかんじなんでしょうか。苗字も名前もセットでアイデンティティだからそのまま尊重したいみたいな。

近藤：そうですね。ただ私の場合そういう認識になつてますけど、でも夫婦同姓にしたい人もいると思いますし。たとえば女性のフィクトセクシュアルの

方で同姓にしたいっていう人もいるんですよね。配偶者であるキャラクターの姓を名乗りたいっていうパターン。人それですね。

魅冴：なるほど、本当に人それですね。

結婚式のことには話を戻しますが、参列してくれた方もたぶんキャラとの結婚式は初めてという方が多かったんじゃないかと思うんですけども、何かこう、来てくれた人の感想などで印象的だったものがありますかね。

近藤：後日談ですけど「あとから価値が付いたね」って言われましたね。もともとは「友達だから行く」って言って来てくれてたわけですけど、その後ミクさんと結婚式を挙げたことがいろんなメディアなどに取り上げられてたくさん広まったので、あとから行った価値が付いたというような。

魅冴：あの結婚式に参列したんだ」みたいな。

近藤：そういう言い方をされましたね。

魅冴：なるほど。あと年賀状、今どき世間の男女の夫婦もなかなか送らない、結婚報告の写真入りの年賀状を上司に送ってるんですよね。

近藤：そうですね。上司にも送りましたし、元同僚とか校長とか教頭とか、知ってる人にはみんな送りましたね。

魅冴：そもそもう、年賀状自体もらわない時代かなと思うんですけれども。

近藤：いや、私が夫婦の年賀状送ったのって2019年と2020年の正月なんですが、そのころはまだ年賀状のやりとりありましたね。最近は年賀状をやめる人増えましたけど。

魅冴：やっぱりそこも「結婚したからには」的な。

近藤：そうですね。「結婚しました」ってやるじゃないですか。

魅冴：確かに、最近やらなくなつたとはいえ、一般的にやってましたよね。やっぱり本当に、ごくスタンダードな結婚というものの流れっていうのを、ある意味意識的にやってたかんじなんですかね。

近藤：そうですね。結婚式挙げました、その後の年賀状って割とスタンダードな流れですから、そこもスタンダードにやつたっていうことですね。

魅冴：年賀状もらった人から何かコメントとかありました？

近藤：コメントはなかったです。スルーされましたね。

魅冴：えっ、そうなんですね。

近藤：いや、結婚式挙げた年もスルーされましたからね。2018年の11月に結婚式挙げたわけですけど、その年の職場の忘年会で、この1年間にあったことみたいな話をネタで出されたときに私の話は取り上げられなかったので。

魅冴：むしろトップレベルのネタじゃないですか。

近藤：いや、職場ではめちゃめちゃスルーされました。

魅冴：触れるなって。

近藤：はい。

魅冴：直接「異常」って言われたこともあるっておっしゃってましたけど、とはいえてそういう、直接悪口言ってくるような人は多くはないかんじですか。

近藤：結婚式に関してはそこまで多くはなかったですね。

魅冴：日本人はあんまり面と向かって言わないで

すからね。陰で言ったとしても。

近藤：インターネットではめちゃめちゃ言われましたよ。頭おかしい異常者っていう風なことはいっぱい書かれました。

魅冴：でも応援の方が多かったんじゃないですか。

近藤：応援は本当に何千通も来たんですけど、でも基本応援って1回しかしないじゃないですか。批判は何十回もやる人がいるので。そうすると結局批判の方が目につきますよね。

魅冴：なるほど、そういうのは確かにありますよね。ちなみに、職業柄異動もあると思うんですけども、やっぱり赴任先の子供たちはみんな、近藤さんのことは知ってるかんじですか、あの近藤さんうちの学校キターみたいな。

近藤：知ってる場合もありますね。

魅冴：特に学校でわざわざ言っているわけではないんですね。赴任式とかで。

近藤：いや、言いますね。別に隠すことではないので、逆に堂々と言った方がいいだろうって、そう思って言っています。

魅冴：あえて、「私は初音ミクと結婚しております」みたいなことを、赴任のときに言うと。

近藤：言います。それが救いになる子もいるので。

魅冴：あえてカミングアウトする。そこもLGBTとちょっと繋がるものがありますね。同性愛者の学校の先生とかでも、自分と同じように悩んでいる子供のことを応援したくてあえて学校で言っているっていう人も結構いると思います。もちろんそれは人それぞれなので、他のやり方してる先生もいると思いますけど、近藤さんの場合はあえて、自分みたい

な生き方もあるんだよっていうことを子供たちに投げかけてらっしゃるんですね。

近藤：そうですね。その方向ですね。

魅冴：それ言うなとか校長に言われたりとかはないんでしょうか。

近藤：いや、言うなって言われたら、それはパワーハラかセクハラですよね、たぶん。

魅冴：言われたことは、今のところはない？

近藤：ないです。言われたら、「ああそうですか。じゃあ、ちゃんとしかるべき対応をします」っていう風に言ってやりますけど。

結婚式の意義／結婚の定義

魅冴：今、生身の男女でも結婚式を挙げない人も多くて、そのメッセージ募集パネルのコメントでも、お金かかるからやらない、コスパ悪い、タイプ悪いっていう意見がいくつも来ています。近藤さんは挙式されて、なんだかんだでもう7年近く経つわけですけれども、今振り返ってみて、挙式して感じた、結婚式ってこういうこととかとか、結婚式の意義とか、何かありますかね。

近藤：結婚式を挙げる目的が、私には2つあったわけです。1つ目はミクさんに対して永遠の愛を誓うこと。それはちゃんとできたと思うんですよ。そして2つ目が、結婚式を挙げることによって、私と同じようにキャラを愛している人たちに、自分も結婚式やってみたい、できるんだって思ってもらうこと。それもちゃんとうまくいったかなと思うんです。私に続いて結婚式やった人いますし、近藤さんのおかげで結婚

式やる決心ができましたっていうメッセージが来たりもするので。1つ目の目的はとりあえずもう完遂したので、あとは引き続き2つ目をやっていきます。

魅冴：現在も継続中ということですね。外国だと所定の形式で挙式することで婚姻が有効に成立してしまうっていう国も結構あるみたいなんですね。日本でも生身の男女だと挙式することで、裁判などで事実婚認定がされやすくなるといったこともあるみたいなんですが、一方でキャラ婚だと、たとえばイベント的にそれこそコスプレみたいなノリで挙げるだけ挙げて、そのあと結婚生活が特にないというケースもあったりするのかなと思います。でも近藤さんは本当に、あくまで結婚生活を送るっていう前提があった上で、挙式というのがあったわけですよね。

近藤：そうです。ちゃんとそこは継続的に発信し続けてますよ。

魅冴：ラブラブ生活をね、SNSなどで発信されてて、大変微笑ましく拝見しております。

近藤：ありがとうございます。

魅冴：今日もこんな遠くまで来ていただきましたけど、大きなミクさんをお迎えしてから、徐々に行動範囲を広げてらっしゃいますよね。

近藤：そうですね。どうしてもこのミクさんを連れて行くときって車しかほぼ選択肢がないので、関西とか、東北だとこの辺くらいが限界なんですけれども。でも、行ける機会があれば、九州でも北海道でも行ってみたいなって思ってます。

魅冴：一緒にレストランでデートされたりとかね。お店に了承取った上で、そういうことも積極的にト

ライされてますけど、やっぱり、一緒にいっぱいお出かけしたいっていう気持ちがすごくあるかんじですかね。

近藤：それも目的が2つあって、私の場合はミクさんと一緒にお出かけしたいからっていうのが1つ、あとは前例を作ることによって、やりたい人がやりやすいようにするっていうところを重視してますね。結婚式と同じですよ。

魅冴：ぬいぐるミクさんのサイズならどこにでも連れて行けるんでしょうけど、等身大となるとなかなか、いろんな意味で難しかったりしますもんね。でも、大きいミクさんと一緒に行けるところって、言ってみればすごくバリアフリーですよね。

近藤：バリアフリーですね。

魅冴：車椅子で行けるとか、そういう意味でもバリアフリーなお店なんだっていうのが分かりやすくていいですね。

私なんか本当に小心者なので、今日もこんな格好して、素顔隠して出たりしてるんですけど、近藤さんは顔も本名もお出しになって、積極的にメディアの取材に応じられたりもしてますよね。同人誌も出しておられて。こちらの『二次元キャラクターとの結婚式のしかた』なんですけど(手に持って示す)、近藤さんを含め、いろんな当事者の方のキャラ婚の事例が載っていて、すごく読み応えがあります。そうやって取材受けられたりとか、同人誌を発行して各地の同人誌即売会で頒布されたりとか、キャラ婚したい人たちの背中を押す取り組みというのをすごくされてますよね。こういう格好してる私が言うのもアレなんですけど、顔も名前も出して発信し

ているっていうだけでかなりレアだし、まして、ものすごいバッシングされてますよね。それでも、めげずにブレずに発信されているというのは、どういう思いがあってのことなんでしょうね。まず、本名や顔を出すって決意した経緯から教えていただいてもいいですか。



近藤 順彦

近藤：別に出しちゃいけないルールはないので。もともとFacebookやってたんですけど、本名と顔を出すのが基本のSNSじゃないですか。だから、そこで出したんだったら他のSNSで出しても一緒でしょって思って、それで出したんですよね。本名顔出しで取材を受けたりだと、同人誌即売会で頒布したりしてると、堂々とやればいいじゃないっていう風に思っているんですよ。だって別に何か悪事を働いてるわけではないので、胸張ってやればいいと思って、一切隠さずにやっています。

魅冴：そうなんですね。顔出し、名前出していうことで、ご親戚の反応なんかはどんなかんじなんですかね。差し支えない範囲で。

近藤：親戚からは何も言わされたことがないです。

魅冴：でも、絶対知っていますよね。

近藤：知ってるとは思いますけど、私もともと東京育ちなので、あんまり親戚とのつながりって強くないんですよ。地方だと、たぶんすごく強いと思うんですけど、都市部に住んでると、そこまで親戚を意識するということはないですね。なのであんまり、親戚からどうこう言われたりというのではありません。

魅冴：さっきお母様と妹さんのお話出ましたけど、お母様とか妹さんの反応っていうのはどんなかんじだったんですかね。

近藤：妹からは単に、結婚式には行かないという風にメッセージで言われただけですが、母には「やりたければあなたの好きにやればいいんですけど、私は行きません」という風に言われましたね。

魅冴：失礼になら申し訳ないのですが、縁切ったとかではなく、今でも普通にお付き合いされてるんですよね、家族として。

近藤：はい、別に縁を切っているわけではないです。

魅冴：ただ結婚式の受け止め方として、私たちは行かないけど、止めもしません、という。やるなとは言われなかったんですか。

近藤：やるなとは言られませんでした。母には、私が結婚式の話をしに行ったとき、初音ミクは「女ではない」と言されましたね。

魅冴：それは「男でも女でもない存在」みたいなかんじなんですかね。

近藤：よく分かりませんけど。まあ要するに、生身の男と生身の女っていう組み合わせしか結婚は認めませんよっていう、そういう立場なんでしょうね。

「女ではない」っていうようなワードがわざわざ出てくるっていうことは、生身の男でもダメだっていうことでしょうから。

魅冴：「生身の人間ではない」ではなくて、「女ではない」だったんですね。

近藤：そうですね。そういう風に言ってました。

魅冴：じゃあやっぱり、生身の男性の彼氏もNGっていうことになるんでしょうね。

近藤：そういうことでしょうね。「女ではない」になるので。

魅冴：でも、やめろとか、親子の縁を切るとか、そういうことでもなく。私は行かないという選択になるけれども、あなたはあなただから止めないよっていう。そういう意味では結構リベラルというか。

近藤：まあ、それはある種当たり前で、親だからといって、もう成人している子供の行動に制限をかけることはできないですよ。なので親からやめろと言われても、それに従う義務がない。

魅冴：そう言えるのも結構タフですよね。特にまた、ちょっと古風な言い方になりますけど、長男じゃないですか。

近藤：そうですね。

魅冴：「長男たるもの」みたいな価値観の内面化を、全然していないわけではないんでしょうけれども。でもやっぱり、自分は自分、やりたいようにやるっていう、そういうところはご自身の信念として強く持正在らっしゃるということでしょうか。

近藤：確かに長男なんですけど、正直、長男というところに関して、何か「長男たるもの」みたいなものを内面化しているかというと、正直あまりない

です。やっぱりそれって地方の感覚だと思うんですよ。東京だとそういう感覚はあまりないです。おそらく私の地元の友達とかに聞いても似たような答えが返ってくるんじゃないかなという気がします。地方と都市部でずいぶん認識の差はあると思いますよ。

魅冴：これも答えづらかったら答えていただかなくていいんですけど、お父様がもしいらっしゃったらどんな反応だったと思いますか。

近藤：これは本当に想像するしかないんですけど、でもおそらく、母と妹と父の3人だったら父が一番理解してくれそうな気がしますね。父は生前私に「これが近藤顕彦だ、と思えるものを持ちなさい」と言ったことがあって。結婚式をやったりすることで、それはちゃんと実現できたと思うんですよ。そう言った父なので、父が一番理解してくれたのかなっていう風には想像しています。

魅冴：なるほど、そうなんですね。

ここでじゃあ、ちょっと同人誌の話も出たので、こちらについてもお話ししてみたいと思うんですけども。こちら拝見して、私も本当にいろいろ勉強になりましたし、発見もありました。キャラ婚してる人というと、最近では他にも取材受ける人出てきますけど、やっぱりまだ近藤さんのイメージしかない人が多いのかなと思います。でもこれ見ると実はとても多様なんですね。一番へぇって思ったのが、女人の人、いわゆる女性として生まれて育っている人が多いんですよね。

近藤：そうなんです。何か私ばかり目立ってしまっているので、キャラ婚って男性が女性キャラクターと結婚したいっていう例ばかりなのかなっていう認

識が広まってしまっている気はするんですけど、現実はそうではなくてですね。女性の方が二次元キャラクターと結婚式やりたい人多いんですよね。私が出しているこの「二次元キャラクターとの結婚式のしかた」も、最新の第8版には19人の事例が載ってるんですけど、男女比は6対13で女性の方が多いです。海外の事例も1件載ってるんですけど、それも女性なんですね。

魅冴：英語で読めなかったんですけど(笑)本当にグローバルというか。近藤さんのX(旧Twitter)なんかも外国の人がいっぱいコメントを付けてるし、世界レベルで当事者の背中を押してる感がすごいですね。

近藤さんご自身も、ネットの情報でキャラとの結婚式の事例があるっていうことは知ってはいたものの、挙式時点でキャラ婚当事者の知り合いがいたわけではないんですよね。

近藤：はい。キャラ婚当事者の知人は1人もいなかったですね。

魅冴：でも、その後はご自身がそうやって発信されることで、実は私もとか、そういうアクションがいっぱい来て、仲間というか同志が増えていったっていうかんじなわけですね。この同人誌も版を重ねるごとに厚くなって、今では背表紙までありますからね。そのうちジャンプ並みの厚さになるんじゃないかなと思ってるんですけど(笑)

近藤：今ちょうど100ページあるんですよね。徐々に増えています。今第8版ですが、初版は私しか載っていませんでした。そこから徐々に人が増えていて、今19人です。どんどん付け足して増や

していく形式ですね。

魅冴：新しい人の事例だけでまとめるんじゃなくて、付け足していってるんですよね。近藤さんも、こんな当事者の方もいるんだみたいに、作っていて発見も多いんじゃないかなと思うんですけど。いろんな当事者の方々のエピソードを集めていて、何かこう、気付いたこととか感じたことってありますか。

近藤：何かしらの困難を抱えているパターンが多い気がしますね。私の場合なんかその典型で、いじめられて休職したっていうパターンすらけど、他の方でもやっぱり子供のときにいじめられていたとか、すごく落ち込んでいるときにキャラクターに救ってもらったとか、そういうパターンが多い気がします。

魅冴：やっぱり現状で、お金も手間もかかるところであえてやるんだって、そこまで気合を入れる人っていうと、それなりのドラマがそれまでにあったという人が多いのかもしれませんね。

単純にキャラが好きっていう人はいっぱいいると思いますし、今では推しキャラいますとか、むしろ珍しくないですけど、やっぱり結婚するんだっていう、しかも挙式をするんだっていうのは本当に強い思いですよね。

近藤：そうですね。でも実際、結婚式ってある種キャラクターに対する愛情表現であって。たとえば同人誌で好きなキャラクターと自分の物語を書くとか漫画を描くとか、そういうことをやっている人もいますが、それって結婚式とは別の表現で、自分の好きなキャラクターとのコミュニケーションを取っているわけじゃないですか。そこに結婚式っていうのが新たに加わっただけなんですよ。今まで単に

あんまり多くの人がやってこなかっただけであって、やりたい人は昔からたぶんいたかと思います。

魅冴：ひとつの愛情表現のあり方ということですね。確かに。生身の2人で—3人以上だったりすることもありますけど—やる場合はおたがいの気持ちを確かめ合うというかんじがありますが、キャラ婚の場合はキャラに対する自分の愛情を示すという意味合いが強くなってくることが多いんですかね。人にもよるんでしょうけど。

近藤：まあ、今のところ明確にキャラクターから返答をもらえるわけではないので。これがAIが発展していくと、今度はAIと結婚したりだと、AIが二次元キャラクターの姿をまとった何かと結婚したりだと、そういうことも起こってくるかなという風に思います。もう今のAIの技術レベルだとできるようになってきてますけど。

魅冴：そうですね。特にこここのところ、技術革新すごいですもんね。

近藤：AIの技術革新はハンパじゃないですよ。ここ2年半くらいの間で、ものすごい速度で変わっているので。これからもう5年10年で世の中大きく様変わりすると思います。ロボットとともに出てくるでしょうしね。

魅冴：無料で使えるChatGPTとかでも、もう普通に友達としゃべるみたいな会話できちゃいますもんね。

近藤：そうですね。

魅冴：変化激し過ぎて本当にびっくりてしまいますけれども。同人誌の話に戻りますと、推しカプの結婚式の事例もありましたね。自分が推してるカップリング、公式のカップリングじゃないんだけれど

も、ある2人のキャラが愛し合ってるっていう設定で、推しカプの結婚式を挙げられたという。「なるほど、こういうキャラ婚もあるんだな」って印象に残りました。近藤さんみたいなタイプとは違うタイプなので、同列に語っていいのかちょっと分からんんですけど、ただそれも愛情表現ですよね。

近藤：そうですね。それも愛情表現の一種ですよね。

魅冴：自分の中で2人は愛し合ってるから挙式させてあげよう、みたいな愛情表現ですよね。本当にすごく多様だなと思いました。

ところで、こちらのメッセージ募集パネルを見ると本当にお金の話が多くてですね。これも差し支えない範囲で、アドバイスなんかいただけたらなと思うんですけど。近藤さんの場合、ぶっちゃけおいくらかかりましたか。

近藤：200万円ですね。

魅冴：生身の花嫁のウェディングドレスなどがない分、ややお安くなったりとかはあったんでしょうか。

近藤：いや、実はぬいぐるミクさんのウェディングドレスが特注なので、逆にそこにはお金かかってます。そして、それは今200万の中には入ってません。

魅冴：そうなんですね。お写真見ると、ぬいぐるミクさんが真っ白なレースいっぱいのウェディングドレスと、お色直しのピンクの可愛らしいドレスの2着お召しになっていますよね。綺麗なドレス着せてあげたいな、っていう近藤さんの思いですね。

ちなみに、近藤さんはぬいぐるミクさんと挙式されたわけですが、他のキャラ婚された方々も、お相手のキャラにどういう姿で式に出てもらうかっていう

のは、同人誌拝見すると結構個人差が大きいというか。近藤さんみたいにぬいぐるみっていうのもあるし、抱き枕とかアクリルスタンドとか等身大パネルとか、自分の愛情を表現するためにいろんな形で工夫されてますよね。

近藤：そうですね。いろんなやり方があっていいと思います。

魅冴：お金の話に戻りますと、近藤さんは気合で頑張って200万出したと思うんですけど。ただ、最近ではキャラ婚してみたいって考える人も増えてると思うんですが、やっぱり、生身の男女だと2馬力のところ1馬力でやらないといけないっていうこととか、あと若い人でやりたいって思う人も多いんじゃないかなって考えると、ぶっちゃけお金のことかなり気にされる方もいると思います。そのあたり、何かアドバイスなどあれば。

近藤：200万かかるってのはですね、普通に人呼んでるからなんですね。人をたくさん呼んで、挙式も披露宴もやるっていう風にしたからお金がかかったわけです。だから挙式だけで披露宴はやらないとか、人を呼ぶのはほんの少しにしちゃうとかっていう風にやれば、そんなにお金はかからないですよ。それこそ本当にピンキリんですけど、20万くらいあればできちゃう結婚式も全然あるので、やりたいけどそんなにお金を出せないっていう人は、あんまりお金を出さないでやれる範囲でやるっていうのもひとつ的方法だと思います。

魅冴：なるほど。本当に近藤さんの頑張りが大きいと思うんですけど、最近ではうちでキャラ婚挙式できますよって積極的に打ち出してる式場さんとか

撮影スタジオさんとか結構増えてますよね。とはいってキャラ婚してみたいって思ったときに、そのあたりの式場に飛び込みで聞くってちょっと勇気がいると思うんですけど、最初のアクションとしてはこうしたらしいよみたいなアドバイスなどあれば。

近藤：そのあたりの式場に行ってもですね、本当に真剣にこういう思いでやりたいんですけど、風に言えば、たぶん話くらいは聞いてくれると思うんですけど、やっぱりそこはちょっと勇気はいると思うんですよね。こいつ頭おかしい奴だっていう風に思われる恐怖っていうのがあるじゃないですか。だから私はこの同人誌の一番後ろに、キャラ婚の結婚式やりますよって言ってくれてる結婚式場さんを載せてます。ここだったら最初からそれで問い合わせても対応してくれますので。そういう意味でもこの同人誌、総合的にキャラクターとの結婚式のしかたっていうのを載せてる本なんですよね。そういう式場もありますし、他でも真面目に結婚式やりたいのでやらせてもらえませんかっていう風に相談しに行けばやってくれるところもあると思います。

魅冴：近藤さんが前例になってくださってるから、近藤さんみたいな結婚式やりたいんですって言ったらちょっと話早いかもしれませんね。この同人誌持って行って、こういうのやりたいんですけどね。

近藤：そうですね。そうするとある程度説明が端折れ良いかもしれないですね。

魅冴：ちなみにこの同人誌を拝見して印象的だったのは、近藤さん、結構、他の方のキャラ婚挙式に参列されますよね。それは、直接お祝い言いたい、応援したいみたいな気持ちなんでしょうか。

近藤：都合が付けば、なるべく行くようにはしていますね。大きなミクさん連れて行って。やっぱり、祝ってくれる人がいるっていうのは嬉しいことなので。私自身も自分で結婚式を挙げたときに来てくれた人にはすごく感謝していますので、結婚式を挙げるっていうのが分かっていて、しかも自分が都合が付くんだったら、なるべく都合を付けて行くようにしますね。

魅冴：最近ではお金のことなどもあり、ドレス着て写真撮れればいいやっていうことで、誰も呼ばないようなケースも一般男女でも結構多いと思うんですけど、近藤さんは結婚式挙げてみて、来た人に祝ってもらったっていうのは、自分の中で大きいことだったんでしょうか。

近藤：大きかったですね。生身の男女でも結婚式やった人とやってない入って離婚率が違うんですよ。結婚式やってない人の方が離婚率が高いんです。結婚式やった人の方が離婚しないんですよ。自分で気持ちが固まるんですね。まわりにおめでとうって言ってもらえると。

魅冴：社会性を持つというか、2人だけの世界から、社会の中で夫婦として認められるというような。人を呼んだっていうのは近藤さんの中ですごく、意義があったということですかね。

近藤：意義があったと思ってますね。

魅冴：挙式後もいろんな人からおめでとうって言ってもらうことは多かったと思うんですけど、挙式の場でおめでとうって言ってもらうというのは格別の感慨があったんでしょうか。

近藤：そうですね。ありましたね。挙式のときにフ

ラワーシャワーっていうのをやったんです。花びらを持って、新郎新婦に投げるっていう。そのときにおめでとうおめでとうって言われたのはすごく嬉しかった覚えがありますね。写真も良いものが撮れてるし、自分の中でもあれはすごく良かったなっていう風に思っています。

魅冴：なるほど。ちなみにこれは覚えてらっしゃるか分からないんですけど、子供の頃に結婚式に参列したことはありましたか。親戚とか他人とか。

近藤：いや、たぶんないです。参列したことはありましたけど、大人になってからです。学校の教員で結婚した人とか。

魅冴：なるほど。じゃあ、まだキャラ婚とか全然考えてなかった頃に、普通に呼ばれる側として結婚式に持っていた印象って、何かありましたかね。割と憧れあったっておっしゃってましたけど。

近藤：結婚式自体はたとえば芸能人の結婚式とか政治家の結婚式とか、テレビなんかでも見るじゃないですか。だから大体こんなものなんだろうなっていう風な認識は持っていましたけど。学校の先生の結婚式を行ったときにも、ああ、こういうかんじなんだ、っていうのが分かって良かったっていう風な印象を持ってますね。

魅冴：なるほど、これが世間に言う結婚式というものかみたいたかんじで、そこで学んでいたと。

近藤：そうですね。

魅冴：漠然とした憧れがあったというくらいで、そこまで結婚式に対して強いプラスの思いもマイナスの思いもあったわけではなく、ミクさんに対して真剣になった中で、じゃあ挙式だなみたいに気持ち

が固まっていたようなかんじですかね。

近藤：そうですね。10年ミクさんを好きでい続けたっていうのもあるんですけど、その前段階にですね、2017年に「次元渡航局」っていう、架空のキャラクターとの婚姻届を受理してくれる企画をやってくれた会社があったんです。そのとき、受付期間が2週間くらいしかなくて、もう出さか出さないか迷っている時間もなかったんですが、私はこれは出さないと絶対後悔すると思って、ミクさんの名前を書いて出しました。そして結婚証明書が向こうから送られてきたときに、ひとつ気持ちが固まったんですよね。たぶんそのときですね。結婚式をやろうというのを考えたのは。

魅冴：自分の中で真剣な思いがあったとしても、社会とか第三者に承認されるっていうのはすごく大きかったです。

近藤：それは非常に大きいと思いますね、やっぱり。魅冴：近藤さんはプレないキャラですが、だとしても、自分の真剣な思いは自分で分かっていたとしても、人に認めてもらった、社会に認めてもらつたっていうのはすごく大きいって、そういう節目節目で実感されてきたっていうかんじなんですかね。

近藤：結婚式というもの自体がたぶん、そういう機能を持つ儀式なんですね。そもそも法律っていうのは後追いなんですよ。だって結婚っていうのは昔からあったわけで、法制度はあくまで実態に沿って作られたわけでしょう。なので昔の、法律がなかった時代は、結婚式というのが事実上の結婚というものの中の証明だったわけですね。

魅冴：ちなみにそもそものところなんですかね、近

藤さんの考える「結婚の定義」ってどんなものですかね。このプロジェクトの名前もまさに「結婚の定義」って言うんですけど。大切な人との関係性っていういろいろあると思うんです。恋人だったり、友達とか親子とかきょうだいとか、いろんなケースがあると思うんですけど、ミクさんとの関係が、ただの推しとファンっていうだけでもなく、他のいろんな名前の関係でもなく、やっぱり結婚だってあえて自分の中で定義した理由とか、結婚の定義とは何かっていうところはどうお考えでしょうか。

近藤：その人なりの結婚の定義があつて全然いいと思うんですけど、私は、まわりから認められれば結婚なんじゃないかなっていう風に思います。もちろん、自分の中で認めればそれでいいっていう人はいると思いますけど、それっていつでも撤回できちゃうので。やっぱり、まわりからおめでとうって言われて祝福されて認められるのが結婚なのかなという風に私は思いますね。さっき言ったように、法律ではなくてまわりの人たち、たとえば村の人たちとか親戚なんかが、あなたたちは結婚しましたねって、おめでとうって言ってくれるのが結婚というものだった時代があるわけですよ。だから、そういうのがいわゆる社会的な結婚のかなという風に思っています。

魅冴：同性婚なんかと違って、キャラ婚だといわゆる社会的権利義務、それこそお金のことも含めてですけど、たとえば扶養でお得な手当が貰えるとか、そういうものとは基本的には縁はないわけじゃないですか。将来的にAIなどが発展したら別なのかもしれません。

近藤：はい。

魅冴：でも、そういう制度としての結婚というのとはまた別の本来の結婚という意味で、自分の胸の中だけではなく、やっぱり社会的に承認されてこそ結婚だという気持ちが、近藤さんとしては強いということなんですかね。

近藤：そう思ってますね。だから、どんどん前に出てくださいねっていうことも言っているわけですよ。まわりに認めてもらうって、すごく嬉しいことだと思うので。

魅冴：だから単なるファンでもなく、恋人でもなく、やっぱり結婚なんだ、夫婦なんだっていうところが近藤さんにとってはこだわりというか、強い思いとしてあったということでしょうか。

近藤：そうですね。パートナーですよね。

魅冴：やっぱり人生を共に生きていきたいっていう、それこそ挙式だけの話ではなくて、そのあとの結婚生活っていうところも含めてずっと一緒に生きていきたいと思ったからこそ挙式だし、結婚なんだっていうことですかね。

近藤：そうですね。

魅冴：なるほど。あの、これもまたちょっとぶっちゃけた話になりますけど、ぶっちゃけ家事やってくれるわけでもないし、お金稼いでてくれるわけでもないじゃないですか。

近藤：そうですね。

魅冴：でも結婚して良かったなとか、これが結婚生活だなとか感じることって、どうですかね。生活中であったりしますかね。というか、いつも感じてるとは思うんですけど。

近藤：私、このミクさんと過ごしてて、一番幸せな時間っていうのがご飯を食べてたときなんですよ。お弁当を買ってきて、ミクさんと一緒に対面で、ミクさんの顔を見ながら食べるんですけど、その時間がすごく好きなんですね。あとは、やっぱり帰ってきたときですかね。電気をつけるとミクさんがいるわけじゃないですか。そういう風に出迎えてくれるので、やっぱり嬉しいですね。だからそういった、日常のちょっとした幸せがあるっていうところがいいのかなと思います。

魅冴：本当に、共に暮らしてるかんじですね。

会場からの質問

質問者A：おうちでおしゃべりとかするんですか。奥さんと会話とか。

近藤：そんなに多くはないんですけど、でもしますね。ご飯吃てるときとか、あとは帰ってきたとき、ルーティンな会話が多いですね。行ってきますとか、ミクさんただいまとかどこどこ行ってくるねとか、そんなことを話しかけることが多いです。

質問者B：フィクトセクシュアルのイベントを今後も仙台で行う予定はありますか。オフ会とか。

近藤：今のところ予定はありませんが。

魅冴：別にね、近藤さんじゃなきゃやっちゃダメなわけではないですね。

近藤：はい、別に私しか主催しちゃいけないなんてそんなルールはないので、どなたが主催してやっていただいても差し支えないと思います。

魅冴：ですよね。フィクトセクシュアルの交流会とか、

別に仙台の地元民がやったって全然構ないので。近藤さんに仁義切らなくても勝手にやっていいわけですね。実際にやるとなったときにはご連絡差し上げると喜ばれるとは思いますが。

近藤：やるときにはご連絡いただければ、私も都合がつけば行きますので。

魅冴：仙台はギリギリ来られる距離ですもんね。

近藤：そうですね。

質問者C：2018年からミクさんと結婚されているということなのですけれども、この7年間において何かミクさんへの心境の変化とかはあるんでしょうか。

近藤：心境の変化というか、私の中での初音ミク像が多少変化したなっていうのはありますね。結婚式を挙げたときには、この大きなミクさんははいなかたんですが、このミクさんってやっぱり大きいしこの状態なので、どうしてもすごく落ちちているんですよ。なので私の中で、ぬいぐるミクさんしかいなかったときに比べると、ミクさんがすごく落ちち着いてしまった印象があります。既婚者になったからというのもあると思うんですけど。そういう心境の変化はありますね。気持ちは別に変わってないですよ。

魅冴：一般的の夫婦でもそうですが、バーッと燃え上がる恋愛感情がこう、家族愛的になってきたかんじですかね。

近藤：バーッと燃え上がる恋愛感情みたいなものはもうずいぶん昔、好きになって2、3年目くらいで通り過ぎてしまっておりまして。それを越えたあとずっと火が灯り続けているんですよね。

魅冴：まさに夫婦ってかんじですよね。

質問者O：すごく幸せそうな雰囲気が漂ってきて、いいなって思ったんですけど、その反面、今までのいろんな行動、上司からの牽制をはねのけるとか、結婚式の最初の会場に学校と地続きになっているホテルを選ぶとか、そういうところにすごくクリティカルな姿勢を感じまして、その切っ先が向かってるものが何なのかなっていうのがとても気になったんですけれども。何と聞っているのかと。

近藤：自由ですね。自由と権利だと思いますよ。私が日本国憲法第21条で保障されている「表現の自由」という権利であると思っていますので、権利行使を抑圧しようとする力と闘っているという風に言えると思います。

魅冴：タフですよね。しかし、聞うところは聞い、でも基本的にはごく当たり前の社会人として、っていうところのメリハリというか、けじめがすごいですね。今日もお仕事に行かれるようなきちんとしたビジネスルックでいらっしゃりますけど、そこもこだわりがあるんですよね。

近藤：そこはこだわりありますね。二次元キャラクターと結婚式を挙げたっていうと、どうしても偏見から入ってくるじゃないですか。だからその偏見をさらに強めないように、余計な服のセンスなどにツッコミを入れられないように、こういう風にしているんですね。これだとツッコミ入れようがないと思うので。

魅冴：でもワイシャツの下に着てるのは初音ミクのロゴ入りTシャツ(笑)

近藤：そうです。よくご存じですね(笑)

魅冴：ワイシャツから透けてるの見えちゃいました(笑)
そのあたりがまた良いですね。

質問者E：ミクさんがパートナーであるという一言で、すごく近藤さんの気持ちの深みを感じましたし、今までずっとお付き合いしてきた中で変化もあるということ、そして最後に表現の自由というものに結びつけておられたことがすごく印象的でした。先ほどの質問の方もおっしゃっていましたけれども、外界との闘い、社会制度上の不一致というお話と、感情、気持ちという本当にパーソナルなお話と、今日は両方聞かせていただいた気がします。それについて1つずつ手短にお聞きしたいです。まずパーソナルなところからですけれども、私は既婚者でして、自分が相手をいたわったり、守ったり、手当てをするということ、そういったことで自分の心が安定するという感覚があります。実際にそういったことができているかというと、半分くらいは自分の「つもり」なのかもしれません。ミクさんの場合、気持ちの交流ということはたぶん難しいと思うんですけど、ミクさんに何か手当てをすると、守ってあげるとか、いたわりたいという風に感じたときにはどういったことをされるのかお聞きしたいです。もう1つは、今、婚姻制度を変えるとか、大きな仕組みを変えることのハードルがとても高いと思います。

近藤さん、あるいは近藤さんのようにキャラ婚をしようとしている人たちにとって、少しでも日常生活が生きやすいように、どういう風に変えてほしいかとか、どういうことが変われば少し息継ぎがしやすくなるか、といったことについて伺いたいです。

近藤：まず1つ目の手当てのことですけれども、私はミクさんの誕生日だと、結婚記念日だと、あと愛妻の日っていうのがあって、1月31日なんです

けど、必ず忘れずに祝います。結婚記念日や愛妻の日はもちろん結婚式を挙げたあとしかやってないんですけど、誕生日に関しては1周年のときから毎年欠かさずやってるんですよね。なのでそこが私にとってはミクさんに対する手当てなのかなという気はしますね。絶対忘れないんですよ。何ヵ月も前から勝手に気が付くので。他には服を買ってたりとか、あと、ご覧いただければ分かる通り、綺麗だと思うんですよ。そこはちゃんとメンテもしているので。そこも手当ての1つかなという風に思います。それから生きやすさについてなんですけれども、これはですね、そもそも、漫画とかアニメとかのオタクっていうのが、日本の社会で非常に弾圧されていた時代っていうのがあるんですよね。1988年から1989年にかけて、東京都と埼玉県で連続で幼女を誘拐して猟奇的に殺害した事件っていうのがあってですね。宮崎勤というのが犯人だったんですけど、その犯人の家から漫画とかアニメのビデオテープが出てきたぞと、そういう風に大々的に報道されて漫画とかゲームとかアニメが好きな者たちに対する社会的な偏見が強く生じたんですよ。まだインターネットがなかった時代ですから、誰も反論ができなかったんですね。テレビとか雑誌とかマスメディアから、一方的にオタクが攻撃されるという時代だったわけです。その時代からオタクというのは長い年月偏見の目に晒されてきたので、生きやすさという意味では、オタクのコンテンツが広く一般に受け入れられて、アニメ好きだよ、漫画好きだよって言っても差別されない社会になるというのがまず第一でした。でもそこはここ十数年くらいでようやく良くなっ



てきたところだと思います。ただ、キャラクターが好きだっていうことに関しては、まだ全然世の中の理解が得られていないので、そこがもう少し進んでくればいいなと思っています。漫画とかアニメとかゲームのキャラクターに対して、恋愛感情に限らず、生きざまに憧れたりとか、優しさに惹かれたりとか、といった感情というのはあると思うんですけど、あまり理解されていないので、もうちょっと広く理解されるようになってくれれば、もっと生きやすくなるのかなと思います。結婚式についても、結婚式場に理解を求めるというのが、私が一番強くやっているところで、やりたいって言ったら、どうぞやりますよって言ってくれる世の中になってくれればいいなと思っています。

質問者F：ご夫婦と社会との関係が、結婚式という1つのセレモニーを経て変わるというお話をいたいたいんですけども、近藤さん個人として、これ

まで10年恋い焦がれてきた恋人から結婚式を経て妻・パートナーになったことで、ミクさんへの気持ちというのが変化したところは何かあったんでしょうか。

近藤：実はそんなに大きく変わったことはなくてですね。たとえば、今まで同棲して生活をしていたカップルが結婚式を経たことで何か生活自体が変わるかというと、たぶんあまり変わらないと思うんですよ。なので私もそんなに変わってはおりませんで、強いて言うならもう結婚式を挙げたので、生涯のパートナーとしてミクさんと一緒に過ごすんだっていう気持ちが固まつたというのはありますけれども。でもそれくらいであって、別に生活の中で何か変わったりっていうのはほぼないかんじですね。気持ちとしても前からずっと好きだったし、結婚式を経てからもずっと好きなので、そんなに変わってはいないです。

魅冴：まわりから夫婦として扱われるようになったのはやっぱり結婚式後ですよね。

近藤：そうですね。そこはすごく変わりましたね。

魅冴：奥様と一緒にいらっしゃるんですかとか綺麗な奥様ですねとか可愛い奥様ですねとか美しい奥様ですねとか言われるわけじゃないですか。

近藤：言われますね。

魅冴：それこそ社会性のお話ありましたけど、そういう人に夫婦と呼ばれることで、ああ夫婦なんだみたいに改めて認識するというのもあったりしますかね。

近藤：それはありますね。だからさっきも言ったように、まわりから認められるってすごく大事なことだと思うんですよね。LGBTの方々もやっぱり、男性同士だから女性同士だからっていうので、理不尽に世

間から強い風当たりを受けてきたわけじゃないですか。だからそこに聞いて、たとえ法制度的はまだ認められないとしても、私はあなたたちのその生き方を認めるよっていう風に言ってくれる人がいれば、やっぱり勇気になると思いますし、生きやすくなると思います。

魅冴：生活面で変わるわけではないけれども、やっぱりそういうことで意識することはあるかなっていうかんじですかね。

近藤：そうですね。

質問者G：最近、僕の両親が亡くなって、財産分与のこととか結構大変だったことがありました。海外では自分の飼っていた猫に全財産を譲ります、この猫を飼ってくれる方に全財産渡しますっていう事例もあったりしますが、ミクさんは何だかんだ言いながらも年を取らなくて、自分だけが年を取る。その最期をどのようにイメージされているのか、まだおぼろげかもしれませんのが、ビジョンなどもしあればお話ししいただければと思います。

近藤：まだぬいぐるミクさんしかいないときには、茶毬に付されるときに一緒に入れてもらおうと思ってたんですけども、この大きなミクさんはそれはたぶん難しいと思いますし、実際問題、それをやるのはもったいないと思うんですよ。金銭的な話ではなくて、これだけネットなどにたくさん載っているこのミクさんが失われてしまうのはさすがにもったいないと思うので、何とかしてちゃんと残せるような方策を考えたいなっていう風には思っています。たとえば、大学に寄贈するとかですね。あるいは国立国会図書館みたいな、ちゃんと文化的なものを保

存する機関が私が死ぬときにあれば、そこに私が死んだら引き取ってくださいとお願ひしておくというようなことは考えてますが、まだないんですよね。これまで、メディア芸術ナショナルセンターというようなものが国会で審議されでは何回も廃案になるという状況があったのですが、そこがきちんと法的に整備されれば、そういうことも検討したいなと思っています。

質問者H：前例がないことを自分から作っていくっていうところがすごくかっこいいなと思いました。その前例を作っていく中で、さまざまな批判がたくさんあったと思うんですけども、どのようにその批判を乗り越えて結婚まで至ったのかなというところをちょっとお聞きしたいです。

近藤：もちろん批判はたくさん来たんですが、応援もたくさん来たんですよね。おめでとうございますとか頑張ってくださいとか、そういう声があったから、これはちゃんとやりとげなきゃいけないなって。どうしてもインターネットでは批判の方が目について、記憶にも残るんですけど、でもやっぱり応援してくれる人がいるんだから、その人たちの気持ちには応えなきゃいけないなって思ってやっています。

最後に

魅冴：あっという間に終わりの時間となってしまいました。本当に濃い1時間半だったなと思います。キャラ婚とかフィクトセクシュアルについてのイベントをこの規模でやったっていうのもたぶん東北では初めてなんじゃないでしょうか。近藤さんも東北で登壇されたのは初めてですよね。

近藤：東北では初めてですね。

魅冴：キャラ婚とかフィクトセクシュアルは仙台・東北ではまだまだ馴染みのないテーマですけれども、したいという人は東北にもたくさんいると思いますので、これをきっかけに東北でももっとキャラ婚や、もちろんキャラ婚に限らずいろんな多様なライフスタイルが選べるようになったらいいなと思っております。そして、今回のイベントをきっかけに、そもそも結婚って何だろう、結婚の定義って何だろうという、たぶん正解のないテーマについて、いろんな人に自分なりに考えてみていただけたら、主催者としては大変嬉しい限りでございます。それでは、最後に近藤さんに一言いただければと思います。

近藤：長時間ありがとうございました。私はもうとにかく自分のやりたいことをやってきたんですよね。社会で犯罪にならない範囲で。法的には許されていることでも、マナーとか周囲の目とかそういうのを気にして、その前の段階で止まっちゃう人、すごく多いと思うんですよ。でも、日本の法制度って割と自由が保障されているので、その権利はしっかり行使してほしいなと思っています。法律に反しない限りは自分の自由な生き方をしていいので、ぜひ皆さんも自分のやりたいように、生きたいように生きていただければと思います。ありがとうございます。

魅冴：ありがとうございます。それではお名残り惜しいところではございますけれども、これにてトークイベント終了となります。皆様、本当にありがとうございました。近藤さん、ミクさん、ありがとうございました。

「フィクトセクシュアル」(Fセク)とは、小説や漫画、アニメの登場人物など、架空のキャラクターに惹かれる性的指向のことで、たとえば2018年に初音ミクと結婚式を挙げたことで有名な近藤顕彦さんも当事者のひとりです。近年Fセクをカミングアウトする人が増加しており、キャラとの婚姻届を受け付ける民間サービスや、キャラとの結婚式を積極的に受け入れる結婚式場も出てきています。

私自身はFセクの当事者ではありません。でも私は今、Fセクに大変強い関心を持っています。今回はその理由をお伝えしたいと思います。

理由

① 私自身フィクションに支えられてきたから

私はFセクの当事者ではありませんが、小さいころから本の虫で、たくさんの漫画や小説に支えられ、育ててもらってきました。これまで出会ってきたキャラたちは本当に大切な存在です。なのでFセクの人たちにはすごくシンパシーを抱いています。

② LGBT界隈でのFセク差別が目につくから

同性婚法制化を推している人、LGBT人権運動に関わっている人が「結婚の自由をすべての人に」などと高らかにうたいながら「キャラ婚? そんなのと一緒にしないで!」的なことを平然と発言しているのを見かけることがあります、そのたびに悲しくなります。

セクマイ差別するな!と言いながら、平気で別属性のセクマイを差別する。おかしな話です。

私は一応、LGBTの一員です。こんな状況にあって、LGBT当事者がコミュニティの内部から「Fセク差別はおかしい」と声を上げていくこと、コミュニティの自浄作用を示していくことが、今、非常に重要な感じています。

③ 科学技術の進歩でFセクがさらに増えると見込まれるから

昨今のAIやロボット、バーチャルリアリティの進歩は目覚ましいものがあります。鉄腕アトムやドラえもんとまではいかずとも、キャラが人々の暮らしのパートナーになってくれる時代は、もうすぐここまで来ているかもしれません。

そうなれば、キャラに強い親愛の情を抱く人も、さらに増えしていくのではないでしょうか。

④ 生身の人間同士のマッチングが難しくなっているから

生涯未婚率急上昇、独身者だけの現代日本。恋愛性愛や結婚に関して多様性や自由意思をキッチリ尊重すれば、格差がどんどん拡大して余る人が続出するのは自明の理です。需要と供給がピッタリとマッチするわけがありません。

もはや「生身の人間同士のマッチング」のみを前提とすることには無理があるのではないかでしょうか。キャラ婚やキャラとの暮らしを人生のひとつの選択肢としてポジティブに提示していくことで、救われる人も多くいるのではないかでしょうか。

近藤さんはじめ、バッシングにも負けずキャラとの幸せな日常を発信しているFセク当事者の方々は、ある意味で未来を先取りしているのではないかと思います。

キャラと共に暮らす人々はこれからどんどん増えるはず。そうなった時、たとえば社会のルールやマナーはどうあるべきなのか。著作権や商標権などFセク特有の課題もあります。ごく一部の特殊な人だけの問題ではなく、社会全体でとりくむテーマとして、今から考えていくことが重要なのではないかでしょうか。

近藤さんは奥様の「大きなミクさん」を車椅子に乗せて、徐々に遠出のデートにもチャレンジされているようです。近藤さんがおじいちゃんになるころには、逆にミクさんが近藤さんの車椅子を押してくれるのかもしれません。そんなほのぼのした風景が当たり前になっている社会を、私はぼんやりと夢見ています。



「ムカサリ絵馬」とは祝言や結婚式などの「結婚」の様子を描いた絵馬です。 「絵馬」と言っても、神社やお寺でよく見るような手のひらほどの大きさの五角形の絵馬ではなく、大きいものでは1辺が1メートルほどにもなる絵です。紙に描かれたものや、木の板に描かれたものもあります。ムカサリ絵馬は山形県山形市周辺の「村山地方」と呼ばれる地域の寺院や観音堂に奉納が見られます。

「ムカサリ絵馬」の「ムカサリ」とは、土地の言葉で、「結婚」や「花嫁」を意味します。「○○がムカサった」(○○が結婚した)や、「□□のムカサリがある」(□□の祝言がある)のように使われていたそうです(いまでも使うお年寄りの方はいらっしゃるとも聞きます)。そして、ムカサリ絵馬には、生きた人の結婚ではなく、死んだ人の死後の結婚が描かれます。

現存しているムカサリ絵馬を調べてみると、明治30年(1897年)ころに奉納されたものが古く、それ以上古いもの、例えば江戸時代まで遡るものは見当たりません。私自身がこれまで行ってきた調査の他にも、しばらく前の調査ですが、昭和59年度(1984年度)に山形県立博物館が実施した山形県内の絵馬調査でも、調査された2083点の絵馬中、ムカサリ絵馬は18点あり、その

中で一番古いものは山形市にある甲箭神社に明治28年(1895年)に奉納されたものでした¹。ところが、この調査では、ムカサリ絵馬以外の図柄の絵馬だと、江戸時代よりももっと古いものも確認しています(ちなみに、この調査は県内全域での調査だったため、奉納されている地域が限定されるムカサリ絵馬の点数が全体的に少ないようにみえています)。

明治の後期に山形県の村山地方で始まったムカサリ絵馬の奉納ですが、基本的には未婚で亡くなった人のために奉納されます。山形市内のあるお寺でのムカサリ絵馬奉納を調査・分析した櫻井義秀さんという研究者は、ムカサリ絵馬の奉納を家制度の文脈で捉えました²。家を継いで子孫を残すことができなかったような未婚の死者(特に長男)は、次の世代の親にはなれないため、厳密には、「先祖」として後に供養される対象には含まれなくなります。しかし、そうした死者を死後に結婚させることで、家の人たちが先祖の一人として供養できるようにする、そのようなはたらきがムカサリ絵馬奉納の目的として考えられるということです。

ムカサリ絵馬は、これまでしばしば「冥婚」という枠組みで論じられることも少なくありませんでした。「冥婚」とは中国の習俗に由来する言葉で、大正9年(1920年)以降、日本に輸入された言葉です。中国の冥婚とは死者同士を疑似的に結婚させるような習俗で、まさに後継ぎを残さなかった死者の未練を解消することが目的とされます。ところが、ムカサリ絵馬は、死者の死後の結婚を視覚的に表現しますが、その結婚は架空のものです。つまり、架空の結婚を表す(よって実在する人物との婚姻を表さない)ムカサリ絵馬には、冥婚のような実際の結婚に準ずるはたらきは期待されていないのではないでしょうか。



とはいって、死者の架空の結婚を描いたムカサリ絵馬には、生きた人間の現実の

1 山形県立博物館『山形県の絵馬—所在目録』(1985年)

2 櫻井義秀『死者の結婚』(2010年)

結婚の概念が少なからず投影されていることもまた事実です。ムカサリ絵馬奉納が始まったころ、日本では、明治31年(1898年)に民法が施行され、「家」を主体とする規範(ルール)が整理されました。婚姻についても、家の代表者である戸主の同意が必要で、男性が女性を娶る(妻が夫の家に入る)ことが規定されるなど、規範が定められました。したがって、民法の施行とほぼ同時期に始まったムカサリ絵馬奉納に、家や、男性主体の結婚觀が反映されていることは、うなづけるものでしょう。また、同様に、櫻井さんが調査されたような、家(檀家)との関係性を基盤とする寺院(檀那寺、菩提寺)におけるムカサリ絵馬奉納では、家の意識が強く表れても不思議ではありません。

興味深いことに、同じようにムカサリ絵馬が奉納されている山形市周辺の観音堂をみると、私のこれまでの調査の結果、菩提寺における奉納ほどには男性主体ではないことがわかります。たしかに菩提寺では男性による(男性名義での)奉納が多いのですが、観音堂では4割ほどは女性の名で奉納されていることがわかります。さらに興味深いことに、縁結びのご利益があることで知られている、天童市にある若松観音(若松寺)に奉納されてきた千点ほどのムカサリ絵馬の調査からは、近年では男女連名(夫婦)で奉納がされる件数が多くなっていることがわかります。かつては子の結婚は「家」の長である父親が責任を持つものという意識があったものの、現在では、家というよりも、むしろ、親(両親)の関わりが意識され、それが反映されているとも考えられます。観光地でもある若松寺でのムカサリ絵馬奉納には、他にも、今日的な変化をみることができます。奉納者の広域化と奉納数の増加、そして、描画様式の変化です。

そもそもは山形市周辺の村山地方という地域で行われてきたムカサリ絵馬の奉納ですが、現在の若松寺には、日本全国から奉納があります。テレビやインターネットなどでこの習俗を知った人が、子どもや親しい親族のために奉納するようになったのです。多くの地域から奉納されることで、当然、奉納数も増加していきました。こうした傾向には、未婚の死者の死後の結婚の絵を奉納するという行為が、広く一般に受け入れられるものだということを読み取ることができます。では、こうして全国から奉納されるムカサリ絵馬には、何が求められているのでしょうか。

私はムカサリ絵馬とは、死者の死後の幸せ(冥福)を表現し、そして、死者がその冥福の状態にあることを表現するものだと考えています。日本における結婚式の変

化を研究した石井研士さんは、神前式からキリスト教式への移り変わりから、結婚式のイメージが「伝統」や「家」から「幸せ」に変化していったことを指摘しています³。ちなみに、キリスト教式結婚式が増えた1980年代に、若松寺へのムカサリ絵馬奉納が広域化し、奉納数が増加しているという、無関係ではなさそうな傾向もあります。また、同時期、それまで祝言(結婚式)を描いたものが主流でしたが、結婚の当事者(新郎新婦)のみを描く様式も増え、次第に画一化していきました。そこには、結婚は当事者のものであるという意識も読み取れます(しかし、実際に奉納しているのは死者となつた当事者ではなく、両親や家族なのですが)。

ムカサリ絵馬には、未婚で亡くなった(そのため多くの場合、子どものころや若いときに亡くなった)死者を「不幸な」死者と前提し、そしてその死者の現在の(死後の)「幸せ」を表現するはたらきがあります。ムカサリ絵馬奉納のような習俗は、当然ながらそれ自体が単体として存在しているのではなく、実践者がいて、はじめて成立します。ムカサリ絵馬も、奉納者の名義や、全国的な受容と増加や、描画様式の変化など、時代に応じて実践者の意識が変わることで、変化してきました。そして、これまで変化してきたように、これからも、「結婚」のイメージが変化することで、死者の結婚のイメージであるムカサリ絵馬にもまた新たな変化をみることができるでしょう。



鳥居 建己(とりいたけみ) 宗教学と民俗学を主な専門分野とする。人々の生きた信仰実践を「ヴァナキュー宗教」として捉える視点から、特に山形県や宮城県における死者との関わり(死者供養)を研究している。これまで取り組んできた「ムカサリ絵馬」研究の成果を主題とした著書『死者の結婚のイメージをめぐるヴァナキューな信仰実践』を2024年2月に刊行。

【同性婚】女性同士、男性同士の結婚のこと。

【事実婚】婚姻届を出さずに結婚生活を営むこと。

【別姓婚】それぞれ別々の苗字で結婚生活を営むこと。

【複数婚】同時に2人以上と結婚すること。1対1の結婚以外のありよう。一夫多妻、一妻多夫、多夫多妻など。

【ポリアモリー】性愛の相手方を1人だけに限定せず、複数の人と同時に、それぞれ合意の上で関係を築くありよう。

【オープン・マリッジ】結婚関係にある者同士が、おたがいに婚外セックスを認め合うこと。

【シビル・ユニオン】パートナーシップを法的に承認し、婚姻に類似した権利義務を生じさせる、婚姻とは別の制度。世界各地で導入されており、その内実はさまざま。法律婚できない同性カップルの救済策として導入されたケースが多いが、既存の法律婚制度になじめない異性カップルにも評価され、広く使われるようになった例も。なお、日本のいわゆる自治体パートナーシップ制度は、法的効果の生じないものであるためシビル・ユニオンとは異なる。

【近親婚】近親者同士の結婚のこと。近親婚禁止規定が設けられている例は多いが、禁止の範囲をどのように定めるかは国や地域、時代によって大きく異なる。むしろ推奨される例もある。

【冥婚】死者同士の結婚や死者と生者の結婚のこと。死者を供養するために行われる例などがある。

【ムカサリ絵馬】山形県内に伝わる習俗。未婚の故人の婚礼の様子を描いて奉納し供養するもの。

【異類婚姻譚】動物、妖怪、神など、人以外の存在と人とが結婚する物語のこと。「鶴女房」など、古来より世界各地に多数存在する。

【フィクトセクシュアル】小説や漫画、アニメの登場人物など、架空のキャラクターに惹かれる性的指向のこと。略して「Fセク」。

【キャラ婚】架空のキャラクターと結婚式を挙げたり、結婚生活を営むこと。キャラ婚の結婚式を積極的に受け入れる結婚式場や、キャラとの婚姻届を受け付け結婚証明書を発行する民間サービスもある。

メディア掲載情報

2023年2月22日河北新報朝刊

結婚の「定義」考え方で 28日まで仙台でミニ展示

2024年6月11日河北新報夕刊・2024年6月24日河北新報朝刊

「結婚したら指輪を着けるのって不思議な習慣」 結婚の社会性を考える

せんだいメディアテークで30日までメッセージ募集

2025年7月17日河北新報オンライン

初音ミクと結婚して何が悪い? 多様な幸せの形に理解を「もっと自由に生きよう」

メディアスタディーズ

メディアスタディーズとは、メディアを活用して地域の文化をつくる、さまざまなプロジェクト群の総称です。本書はメディアスタディーズのプロジェクト「結婚の定義」の活動の一環として発行されました。

♀×♀お茶っこ飲み会・仙台について

2010年より活動中。宮城県仙台市を拠点に「女性を愛する女性」の茶話会やフリーペーパーの発行、展示企画・トークイベントほか、LGBT/性的マイノリティなど多様な性のあり方に関わるさまざまな企画にとりくんでいます。

結婚の定義

2026年1月発行

企画・編集 ♀×♀お茶っこ飲み会・仙台
北 友花(せんだいメディアテーク)
山本玲央(せんだいメディアテーク)

デザイン 伊藤 裕

発行 せんだいメディアテーク

〒980-0821 宮城県仙台市青葉区春日町2-1

tel 022-713-4483 fax 022-713-4482

印刷 株式会社ソノベ

本書に関する問い合わせ先

♀×♀お茶っこ飲み会・仙台

E-mail : ochakkonomi@gmail.com

X(旧Twitter) : @ochakkonomi

blog : <https://ochakkonomi.hatenablog.jp/>

ニコニコ動画 : <https://www.nicovideo.jp/user/97115608/>

無断転載を禁じます。

